
カラフルデイズ

yuma.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラフルデイズ

【Nコード】

N7391D

【作者名】

yuma.

【あらすじ】

日常の中に散りばめられている「色」。実に様々な色彩。そんな日常を何となく過ごしていく主人公と周囲を彩る友人たち。まったく系でお送りする、カラフルな学園ストーリー！

茜色サンセット（前書き）

久しぶりの小説執筆。

定期更新目指して頑張りますので、よろしくお願いいたします。

茜色サンセット



薄くて淡い睡眠が、軽やかなチャイムの音で打ち破られる。

ぼんやりとした瞳で前を見据えれば、頭の禿げ上がった世界史教師が教室から立ち去るところだった。

視線を上にとげると、飾り気の無い時計が目に入る。針は本日最後の授業が終了したことを知らせている。教室内には放課後特有の開放感が漂い始めていた。

それはともかく。

……また居眠りか。

ここ最近ずっとである。

睡眠時間に大幅な変動があったわけではない。ただ単に、一日分の疲労が大きすぎるせいだ。

「いやいや、今日も終わったねー!!」

どこまでも突き抜けていきそうな、清涼感抜群の声が聞こえた。顔を向ければ、一人の少女が視界に入る。

「ああ……」

僕の日常のウェイトを、とことん重くしてくれやがる張本人のご登場だ。

まどり ひなた
真鳥陽。

いつもどこでも、明るく元気で騒がしいハイテンションキャラ。

肩にかかる色素の薄い髪は、地毛だが相当赤っぽい。前髪に付けた濃紺の髪留めが映えている。

身長は平均的で、全体的に華奢な印象。

そして僕のご近所さん。我が家の正面が真鳥家である。

僕はこの学園に入学する前は、違う地区に住んでいて、中学卒業と同時に学園の近くにある住宅街に引っ越してきた。

越してきて始めてできた友人が陽だ。

初対面の感想は、軽い衝撃。

陽は（少なくとも見た目は）もの凄く可愛くて、引越しバンザイ！と僕は心の中でガッツポーズ。しかも話を聞けば、高校も僕と一緒に。これは楽しい学園生活になりそうだと淡い希望を抱いていた。

のだが。

同じ時間を共有し、次第に真鳥陽という人間の全貌が見えてきたのだ。

例を挙げさせていただくと、コイツはどうにも悪ノリの過ぎるところがある。

一人で暴走する分には一向に構わないのだが、僕を巻き込むだけはやめてほしい。

本人に自覚が無いのも困りもの。

それは最近も同じで、むしろ悪化の一途を辿っている。

テンションがマッハで落ちていく僕を見て、陽が心配そうに顔を覗き込んできた。

その顔がやけに可愛くて、悔しさを覚える。

「元氣ないよお、アキト？何かあったの？」

アナタのせいですよ、陽さん。

昨日の夜も無駄話に延々と付き合わされましたから。

「別に何もないよ。強いて言うなら、夏休みボケが長引いてるのかもしれない。頭がボーっとしてる」

無意識のうちに嘘をつく。

何をやっているのかな、僕。

「だから、今日は部活不参加。真っ直ぐ帰るとするよ」

そう言つて僕は立ち上がり、鞆を手にする。

「じゃあ私も帰る！」

手を突き出して、声高に宣言する陽。

「え…いや、何で？」

「何でって、アキトがいないんだったら部活行く意味無いし」

さも当然のように陽は言う。

曇りの無い笑顔だ。

「僕のことは放っておいていいから、部活行けよ」

「行つたつて別に何をするわけでもないじゃん」

痛い所をついてくるねえ。

確かにその通りだ。

集まって、適当にダベって、解散。その繰り返しでしかない我が部。

僕の把握している部員は七名。我らが二年生は四人、一年生が一人、三年生は僕の知り合いの二人。三年生はもつといるのかもしれないが、存在は確認していない。

しかも三年生は顔出さないからなあ。きっと会わないまま卒業を

迎えるのだろう。

「…わかったよ。じゃあ帰るか」

「うんっ！」

僕は教室内を見渡して、同じクラスに所属する我が部活動の部長である友人を探したが、姿は見えず、諦めることにした。

わざわざ部室に顔を出すのも面倒だし。後でメールでも送っておこう。

何故だかニコニコと嬉しそうな笑顔の陽を連れ、僕は教室を後にした。



外は綺麗な夕暮れで、タチの悪い残暑のモヤモヤした蒸し暑さは和らいでいた。

陽と並んで、通学路である商店街を歩く。

今は九月。

夏休みが明けて日数が経過したが、相変わらず授業はマツタリ感あふれるテキスト。

僕らの通う学園は一応有名な私立で、レベルもそれなりに高い。しかし学園全体に漂うお気楽ムードは無視できないものがある。

ま、どうでもいい話だけれど。

「吹く風が涼しいねえ。もうすっかり秋だよ秋。楽しい季節だあ！」

「お前は色気より食い気だからな」

「うぐ…否定はできないけど…そうじゃなくて！来月は年間で最大の行事、学園祭だよ！？」

ほっそりとした人差し指を、僕の眼前に突きつける陽。

「今年もやって来たか…最も過酷でヘビーな行事が…」

ウチの学園祭と言えば、そこそ有名で、ここら辺の高校でも一番大規模な学園祭だ。

もう動き出しているクラスもあるよな、確か。

その分、毎年かなりの盛り上がりを見せ、僕のように祭りが苦手な人間は非常に場違いである。

「ウチのクラス、今年はお化けの仮装をするらしいよお。仮装して何するかは知らないけど」

お化けの仮装？

お化け屋敷か何かだろうか。

どちらにせよ、面倒に変わりはない。

裏方希望で。

「アキトは何かなあ…やっぱり容姿的にドラキュラかな!?…あう…アキトのドラキュラ…似合うよお! 血い吸われた…いい!!」

顔を赤らめて身をよじり、妄想全開の陽。

みつともないからやめろ。

「僕は裏方がいいんだが…」

「結婚を約束した男女…しかし突然、花婿が自分は吸血鬼であると告白!…花嫁(私)の体を前にして、自分を抑えきれなくなった吸血鬼(アキト)…そしてとうとう——!!」

聞いちゃいねえ。

恍惚の表情のまま、陽の一人芝居は続く。

「首筋に突き立てられる欲望の牙…美しくも残酷で、血塗られた愛のカタチ…ああ…素敵すぎる…そしてそのままベッドイン!!」

おい!!

僕は耐え切れずに突っ込みを入れる。

「あのなあ！僕は仮装もしないし、血も吸わないし、ベッドインもしねえよ！タチの悪い妄想はやめろ！！」

僕の言葉に陽は不満げな表情になる。

「むう…でも仮装くらいはしようよ。クラスの雰囲気ってもんがあるでしょーよ」

ぬ。

陽にしては珍しく正論である。

まあ、いくら僕がイベント嫌悪症候群だとしても、自分のワガママでクラスの輪を乱すようなお馬鹿さんではないつもりだ。

「一応、考えとく」

念のため、否定も肯定もしないでおく。

「……ドラキュラかぁ…」

何やら、陽がボソボソと呟いている。

聞き取ろうとした僕が体を傾けると、いきなり陽が抱きついてきた。

「は！？」

次いで、首筋に甘噛みの感触。

何をされたのか、瞬時に理解。そして驚愕。

商店街のど真ん中だったの！

しかも超地元！

ほら、顔見知りのオジちゃんオバちゃんばかり！

『今日も仲が良いねえ』的な視線がやけに痛い！！

このままではマズイと直感で悟る。

「何しやがるヒナ！」

僕は強引に陽を引き離す。

あ、ちなみにヒナってのは陽の略称です。説明するまでもないか。

そして、一目散にここから退避を試みる。

ギアを思い切って6速まで上げて、走り出す。

そんな僕の後ろを、陽は笑顔のまま追いかけてくる。

怖い怖い！！

「もう…そんなに急いでどうしたのアキト？…あ、分かった。『家に帰って続きを早くやろうぜ！』ってことね！合点だい！！」

「ちげえ!!」

季節は秋。

風が香る夕暮れ。

走る僕。

空は、とても綺麗な茜色だった。

山吹色スイーツ（前書き）

予定としては、駆け足で一年を巡るつもりです。
良ければお付き合いたいと思います。

山吹色スイーツ



九月も終盤に差し掛かったある日の放課後。

僕ら学生は、来月の中頃に控えた学園祭の準備に追われていた。

といっても我が二年C組は、そこまで準備に情熱を傾けなくても構わないのが現状。準備をするのは仮装の衣装のみなのだ。

お化けの仮装をするとは聞いていた。しかし、それで何をやるかまでは知らなかった。その内容が本日明らかになった。

ウチのクラスの出し物。題して『アーリー・ハロウィーン』。

簡単に言えば、フライング気味のハロウィーンを学園祭の中でやるう、というフザけた企画。学祭中なら、どこに行っても食い物はあるだろうからな。

しかし、よく通ったな。この企画。

被害に遭う方はたまったもんじゃないぞ。

発案者誰だよ、全く。

「∴学園祭、楽しみだね」

時刻は放課後。

場所は部室棟の一室にある、我らが『郷土史研究部』の部室。

十畳ほどの部屋に、テーブルとパイプ椅子が乱雑に並べられている。

読書に興じていた僕の意識を現実に戻す、鈴を転がすようなスイートボイス。

「そうか？僕はあんまり乗り気じゃないけど」

「…アキトは去年もそんなこと言ってた」

「そうだった？」

「…そうだった」

「…そうですか」

たかみね ゆえ
高峰友絵。

妙に会話のテンポが合わせづらい、この少女の名前だ。郷土史研究部の副部長でもある。

長い黒髪を、後ろで無造作に一つ縛り。デキるキャリアウーマンみたい。オプションで眼鏡を是非ご所望したいね。

そして何と言っても特筆すべきは、その殺人的なまでのスタイルの良さ。制服姿には犯罪の香りすら漂っている。もうすぐ冬服に衣替えなのが惜しい…って！それはどうでもいい！

パツと見にはクール系美人だが、迂闊に近づけば痛い目に遭う。
中身は、墨汁に飛び込んだカラスもビックリの腹黒ドSっ娘。

リアルに怖い。

「…アキトのクラスはフライングでハロウィーンだっけ？学園祭
を逆手に取った面白い企画だよね」

「そうか？ただの反則技じゃん」

他のクラスに申し訳ないよ。

「…アキトも仮装するんだよね？ドラキュラ」

「あー…まあ…」

不本意ながら、これは決定事項。陽の発言にクラス中が乗っかり、
僕は晴れてドラキュラに大拔擢された。

不本意だ。

「…きつと凄い似合うよ。色白だし、髪もいい感じに長いし。絵
に描いたようなドラキュラだよ」

うーん。

そうは思わないけれど。

「…ちなみに、ウチのクラスの出し物はクレープ販売。良かった

ら来てね」

「おう。是非」

甘いものは割りと好きな僕。

暇を見て足を運ぶでしょう。

僕は読みかけの小説を再び手に取り、ページをめくり始めた。

すると友絵が、何の前触れもなく切り出す。

「…あ、そうそう。その小説ね、主人公を殺そうとした犯人、実は幼馴染のヒロインだよ」

「っ!？」

ちょ、ええ!？

いきなりネタバレ!？

クライマックスに向けて動き始めた所だったのに!!

「ゆ…友絵…その仕打ちはあまりにも酷すぎないか？僕、何か悪いことした？」

僕の悲痛な訴えを、友絵は実に満足そうな笑みで薙ぎ払う。

「…だって…アキトを苛めるのが私の生きがいだもん。くすくす…アキトの困った顔、可愛い……♪…くすくす…」

ぐはあ。

理不尽だ。あまりにも理不尽すぎる。

「泣きたい…」

「…くすくす…私の胸で泣いていいよ…？ほら、おいで…」

ニヤニヤ笑いを浮かべた友絵が僕に手招きする。

くっ！そんな悪魔の囁きに耳を貸してたまるか！ちょっと魅力的な申し出だけど…絶対裏がある！

頭を振ってクールダウン。ついでに雑念も振り落とす。

ようやく落ち着いてきた頃、不意に部室のドアが開いた。

姿を現したのは、陽。

手にはトレイを持っている。

「見かけないと思ったら…どこ行ってたんだ？ヒナ」

「えへへっ。地球環境に優しい女子高生を演じてみようと思いついて。資源の有効活用ですぜい」

そう言って陽は、僕と友絵にプラスチック製のカップを手渡す。

「陽ちゃんお手製、パンプキンプリンなのだぁ！ハロウィーン用

のカボチャ、くり抜いた部分を再利用いたしましたっ！」

えっへん、と誇らしげに胸をはる陽。

「ふうん、美味そうじゃん」

「…いただきます」

友絵はスプーンを手に取り、早速食べ始める。

どれ、僕も…

カボチャの色を反映した、明るい山吹色のプリン。小奇麗に作られていて、金を取れそうな出来だ。

スプーンですくって、口に持っていこうとしたところで、思いとどまる。

何故って。

陽がやけに真剣な目つきでプリンの行方を見守っていたから。

「あのさヒナ、地球環境に優しい女子高生だったら…プリン作りに不必要なモノを入れたりしないよな？」

ギクリ、と固まる陽。

正直者め…

「な、な、何を疑っているのかなあ、アキトは！？私の愛情

の塊であるハンドメイド・プリンを目の前にして！当たり前じゃんか！ unnecessaryモノなんて…しょ、しょんな…」

オロオロと慌てふためく陽。

舌も回らなくなってるじゃねえか。

「じゃあ、試しにお前が食ってみろよ。ほれ」

僕はプリンを陽に差し出す。

「……いいの？」

「え？」

予想外の切り返し。

その言葉の意味するものは？

「とか何とか言っちゃって、一時撤退！ドロン！！」

そう叫んだ陽は、尻尾を巻いて逃げようとする。

「逃がすか！！」

僕は素早い動作で腕を伸ばす。

ギリギリの所で陽の左腕を掴むことに成功した。

「やゝん！アキトのターゲットがプリンから私に変わったあ！た・

べ・ら・れ・るゝ！」

大声で人聞きの悪い台詞を吐くんじゃありません。

観念させるために、陽の両頬をつまんで軽く引き伸ばす。

あまり力技に訴えるのは好まないが…やむなし。

「怒らないから言ってみようか？洗いざらい吐けば、許してやらんこともない」

「うう……頭を撫でて、ほっぺにチューしてくれたら…って、痛い痛い痛い！！」

「頼むから素直に白状しろ。絵的に言っ、て、好ましい場面じゃない」

「分かったよお…白状します…ちょっとした、自分の欲望に忠実になるクスリをですね…」

やっこのことで口を割ったかと思えば、とんでもない真相が明らかになった。

大体、そんな危険な代物をどこから。

…ちょっと友絵さん？いきなり目を輝かせて話に聞き入るの、やめてもらえる？

「さっきアキトが言った時、食べてみても良かったんだけど…アキトの安全は保障できなかったよ？」

「さも、『僕が暴走するのは構わない』的な発言はよせ」

「それは…だって…そのままの意味だし。——ねえ、友絵？」

！？

陽が意味あり気なアイコンタクト。

それとほぼ同時に気付く、背後に感じるナニモノかの気配。

だが、時すでに、遅し。

回避行動に移す前に、後ろから手足をガッチリと友絵にホールドされる。

背中に感じるのは禁断の感触。

夏服の生地 of 薄さに乾杯。

などと浮かれている場合では全く無い。

「さてさて…お口をあぐんしましょうねえ…アキト…えへへ……」

瞳に狂気の光を宿し、満面の笑みで近づく陽とプリン（有害物質）。

耳元では、友絵の甘ったるい声。

「…すごい美味しかったよ？一口食べてみようって……じゃない

と、私がアキトを食べちゃうぞ…あむ♪」

僕の左耳を、友絵が遠慮なしに食む。

「ちよつと待て…お前ら…：…何事にも、越えちゃいけない一線が
だな…」

『限界は、超えるためにある!!』

「声を揃えて楽しげに言うな馬鹿野郎!!…：…ちよ、嫌ああああ
あああ!!…!!」

学園祭前の秋の一日。

部室は今日も騒がしく。

絶叫する僕の視界の端っこ。

山吹色のプリンが笑みを浮かべていた。

山吹色スイーツ（後書き）

ちなみにハロウィン用のカボチャは大きさに特化している為、味の方はよろしくないそうです。悪しからず。

黒色ハロウィーン(前書き)

学園祭が始まります。

今回は少し長めになってしまいました。

黒色ハロウィーン



学園祭当日は、心地よい晴天が広がっていた。

敷地内に足を踏み入れれば、賑やかな飾り付けが出迎えてくれる。

「いやはや、とうとうこの時が来たねアキトっ！テンション上がるう♪」

傍らで騒ぎ散らかす陽は、早くも祭りの空気に馴染んでいるようだ。

対する僕は、やっぱり気が重い。

それなりに楽しむとしよう。

と、心の中でリミットを設定しつつ教室へ向かう。

ビッシリとチラシで埋め尽くされた壁には、スプーン小さじ一杯分の同情を。

教室のドアを開ければ、早くも祭色のテンションに染められた馬鹿鹿野郎が一匹。

……いや、コイツはいつもと何ら変化は無いな。

「いよっすアキト！今日は楽しい学園祭！盛り上がっていいこうぜ

!!」

「……ソウダネ…」

「だよねっ！楽しまなきゃ損だよっ！」

「おう、さすが陽！分かってるじゃないか」

「当然でしょっ！今日は声が枯れるまで騒いでやるんだからっ！
！せいのっ！」

『ビバ☆学園祭!!』

声を揃えて馬鹿みたいに騒ぐ約二名。

僕には、とてもじゃないが真似できない。

あ。ちなみに陽と一緒に騒いでいるのは、クラスメイトの航平である。

さがら こうへい
相良航平。

クラスメイトにしてハイテンションな迷惑キャラ。

やや平均よりも小さい身長に、やや平均よりも甲高いハイトーンボイス。そして出来損ないのニワトリみたいなトサカヘアーが特徴。

それと、馬鹿。

面倒なのでここら辺で紹介終わり。

何となく教室内を見渡してみれば、ちらほらと仮装済みの連中が目に入る。

「僕たちもそろそろ着替えた方がいいのか…？」

「かもなあ。じゃ、レッツゴー仮装！うおらー！！」

「お前少し黙れ」

冷静に突っ込みを繰り出しつつ、僕と陽と航平は衣装を手にし、更衣室へと向かった。

数十分後。

着替えを終えた僕は、完全なドラキュラモード。

やれやれ…

チープなタキシードの上に、安っぽさ全開の手作り黒マント。オプシオンとしてシルクハットを被る。どうでもいいけど、ドラキュラって帽子被ってたっけ？

「おーおー。さすが様になってんなあ。腹立つくらいに似合ってるぜ、ドラキュラ」

楽しげに冷やかしてくるのは、狼男に変身した航平。

僕の衣装に負けず劣らずの安っぽさである。

頭にイヌミミカチューシャ、そして手袋と尻尾を装着。制服のワイシャツはそのままに、学園のネクタイとは別の赤色ネクタイにチェンジしている…が。頬に描かれたヒゲが何とも間抜けだ。

「お前も似合ってるぞ。その…狼男…くくっ」

「笑ったな！？お前今笑っただろ？何だよ何だよ、俺だってなあ…もっと格好いい仮装がしたかったやい！！」

悲しみに浸る狼男。

やべえ、超笑える…

「いや…狼男も仮装の仕方によっては格好いいだろ。あとはお前のセンスの問題だ。そのヒゲの必要性を疑うぞ、僕は」

「いや、ヒゲは必要不可欠じゃね？」

「そうなのか？」

「そうなのだ」

訳わからん。

と、他愛もないやりとりをしていると、陽が現れた。

「おまたせっ！…どうどうどう？魔女っぽい？」

そう言いながら、凄い形相で詰め寄ってくる。

陽も制服のブラウスはそのままに、ネクタイを白黒チェック柄にチェンジ。スカートもネクタイとお揃いの柄だ。僕と似たような黒マント、そして三角帽に長めの杖、肩からは例のプリン騒動を生み出したジャックランタンを下げている。

随分、気合の入った仮装ですな。

「すげえ似合うぞ、陽！」

航平が賛辞を述べる。

が、陽のリアクションは随分なものだった。

「え？ ああ、ゴメン。航平に褒められても不快なだけ」

とっぴきりの笑顔で言い放つ陽。

ドンマイ、航平。

あ、地べたに這いつくばってヘコンでる。

「にしし…どうどう？ アキト？」

なおも接近を止めない陽の頭を手で制止。

とりあえず、思ったことを口にしようか。

「何て言うか…初心者マークを貼りたてな魔女って感じがする。
ドジ連発のイタい新人魔女って雰囲気だ」

「えっ！？キュートでプリチー、かつセクシーでメロメロ？抱きたくてしょうがない？もう…しょうがないなあ…今夜の二人の為に、解けない魔法をかけてあ・げ・る♪」

「お前、実家の病院で脳の検査をしてもらった方がいいぞ」

陽の実家は大病院を経営しております。金持ちです。

…まあ、この学園は金持ちが多いけどね。その中でも陽は上位にランクイン。すげえどうでもいい話だな。

「むう…アキトのイジワル…」

おや。

ちょっと不機嫌モードに入ったようだ。

仕方ない…今日の所は僕が折れるとするか。

「普通に似合ってるし、可愛いと思うぞ」

ポンポン、と軽く頭を撫でる。

陽はしばらくの間フリーズしていたが、数秒後に動き出す。

「え、ちょ、アキト！もっかい！もっかい今のっ！！」

「教室まで競走な。よゝい、どん」

「え、ええ！？似合わない台詞を吐いて誤魔化すなゝ！！」

大声で騒ぎつつ、教室に戻る僕と陽。

…え？

航平？

誰だっけそれ。



無駄に長ったらしい開会式を終え、とうとう学園祭が始まった。

僕は心の中で気合を入れ直す。

ファイトだ自分！頑張れ自分！

「よし！行くよアキトっ！楽しいハロウィーンの始まりだい！
」

行き場の無いテンションを、杖をブンブン振り回すことで発散する陽。

危ないからやめなさいね。

「本当に行くのかよ…売り物を買わないだけに恨みを買いたいような企画だよな、これ」

「気にしない気にしない！学園祭におけるトリックスターの役割

を担ってやろうじゃないの！」

嫌だな、僕はそんな役回り。

帰りたくなってきた。

僕の心中とは裏腹に、陽はパンフレットを取り出してターゲットの選別作業に入っている。

「サッカー部の焼きそばに、テニス部のかき氷…科学部のケミカルカレーなんてのも美味しそうだね…」

「まあ、とりあえず友絵のクラスと奈月ちゃんなつきのクラスには顔出しとこうぜ」

「そだねえ。それは、おいおい行くとして…まずは校舎の外から攻めよう！」

「はいはい」

僕は陽に右手を預け、ただただ引きずられていくのだった。

「いや〜大漁だねえ。って言うか大量だねえ！開いた口が塞がらないのだあ」

「それ使い方違う……にしても、何とかなるもんなんだな」

トリックオアトリートの掛け声と共に各所を襲来して二十分程度。

あれよあれよと言う間に、僕らの両手は食い物で塞がった。

今は中庭のベンチに腰を下ろして、戦利品を賞味中。

「みんな良い人ばかりだねえ」

「…お前がいたからじゃないのか？」

「またまたあ。嬉しいこと言ってくれるじゃないっ！」

「…厄介事を恐れたとか、郷土史研究部に関わりたくないとか…」

「アキトお…そんなことばかり言っていると怒るよ？接着の魔法をかけて、一生私と離れられないようにしてやるっ！」

随分と原始的な魔法があったものだ。

とか何とか言ってみたものの、陽がいたからっていうのは大きいだろう。

見てくれだけは可愛いもんな。

今日は、特に。

ねだられたら、男として断りづらい感はある。

それと、郷土史研究部ってのも結構重要だろうか。

名前だけは知れ渡っている我が郷研。色んな事やらされていますから。

ぶっちゃけ、郷土史も研究も一切関係ない。

とっとと改名したほうがいいと思う。

…どうでもいいけど。

「やっぱり、女の子は得だよな」

しみじみと思うよ。

「そうかな？ 私だけだったら、女の子のハートはキャッチ出来なかったと思うよ？ 美系のドラキュラがいたからこそ、この戦績！」

そう言っつて綿飴を頬張る陽。

同意はしかねるが…そういうことにしておこうか。

心の中で呟き、僕もたこ焼きを口に放り込む。

うわぁ、生焼けじゃん。

素人臭さがあっていいけれど。

僕がたこ焼きに評価を下していると、陽が言う。

「ねえ、あそこにいるのって和哉じゃない？」

「ん…？ ホントだ」

僕らの座るベンチより離れること数メートル。

腰を下ろした男女の片割れには見覚えがあった。

新藤和哉。しんどう かずや

クラスメイトにして、郷土史研究部の部長を務める厄介な男だ。

長めの髪に切れ長の目、細長い手足と、何もかもが長い。全体的にシャープで鋭い印象。

動物で言うなら鷹とか鷲とか、そんな感じ。

格好良いけど、威圧感がある。

ちなみに郷土史研究部の部長になったのは、『部長』という肩書きが欲しかったからに違いないと僕は踏んでいる。

ああ：言い忘れてたけれど、もちろん郷研の出し物なんてありませんよ。ははは。

それはさて置いて、とにかく食えないヤツなのだ。

そんな和哉が、女の子と二人きり。一体どんな状況だ？美人系の綺麗な娘。：でもどっかで見たことあるような：

和哉の仮装はミイラ男。顔半分を包帯で隠している。ダークグレイのワイシャツに、だらしなく巻かれたネクタイ。開いた胸元にも包帯が巻いてあった。

二、三会話を交わした後、女の子が立ち上がる。

女の子が離れるのを待って、僕と陽は和哉へと駆け寄った。

「和哉も隅に置けないねえ。学祭中に女の子口説いちゃうんだ？にしし」

「そんなじゃねえよ。色々あってな」

色々？

はて、またトンデモナイことをやらされるんじゃないだろうな？

僕の心を読んだかのように、和哉が僕を一瞥する。

「…いや…アキトじゃ無理だな」

僕じゃ無理らしい。

よく分からないが、助かった。

「ねえねえ、色々って何？おせーて和哉！」

「気にすんな。そして忘れる。お前らはとっとと学祭を楽しんで来い。ほら、行った行った」

「ふーん…まあいいや。行こっかアキト」

「そうするか。じゃあな、和哉」

僕らが立ち去ろうとすると、声をかけてくる和哉。

「おう…ああ、そうだ。一つ頼みたいことがある」

「何だ？」

「俺は今から教室で企画を立ち上げようと思うんだが…その宣伝をお前らに頼みたい」

「別にいいけど…何をやるんだ？」

「『狼男を仕留めて豪華商品をゲット！』的な企画だ」

ふむ…

どうやら、不憫なアイツにも出番がやって来たようだな。

「気が向いたら、お前らも来いや」

「ああ、そうする」

僕らは和哉に見送られ、中庭を後にした。



次に僕と陽がターゲットに選んだのは、二年D組のクレープ。

友絵のクラスだ。

ドアの前で呼吸を合わせ、同時に開く。

せーのっ、

『トリックオアトリート!!』

「食べ物くれないと、悪戯しちゃうぞ〜♪」

「…しちゃうぞ〜」

最初是不審気な視線を向けられるが、すぐに苦笑に変わる。

段々慣れてきたな、この展開。

「とうとうウチにも来たか、噂のハロウィン」 「何て美味しい企画なんだ」 「真鳥さん可愛い！」 「桐山くん格好良いよっ！」 「真鳥さんに魔法をかけられた！見事にハートを盗まれた！」 「このコンビは反則だろ」 「…相良くんはいないのかな…」 「リアルに血い吸われないんだけど」 「しゃあない、食ってけ食ってけ」

おお…歓迎ムードで嬉しい限りだ。

あ、ちなみにキリヤマってのは僕の名字です。どうでもいいですね。

「…いらっしやい。お騒がせコンビ」

教室内に置かれた椅子とテーブル。

そこに僕と陽が腰を下ろすと、友絵がやって来た。

制服の上にエプロンというシンプルすぎる格好だが、何故だろう、友絵が着ると常にエロさが付きまとう。

具体的に言うとは……膨らみ？……ごめんなさい。

「…アキトにはタダであけてもいいけど…陽はどうしようかな…」

「何それ！？差別だよ！訴えてやるっ！」

ジタバタと手足を動かして、暴れる陽。

「…無銭飲食のくせに威張るな」

やけに陽に冷たい友絵。

「友絵、どうかしたのか？今日はやけにキツイな」

「…別に……陽はアキトとずっと一緒に羨ましいとか、そういう裏事情は絶対に語らないよ？」

温度の無い瞳で陽を見る友絵。

怖い怖い！

「う…友絵が久しぶりに怖いよお…」

陽はビビッて縮こまっている。

「…はい。お待たせ、アキト」

そう言って、友絵が皿にデカデカと盛り付けられたクレープを持ってくる。

凄いボリュームですな。

「ああ、どうも……って陽の分は……ごめんなさい」

目で脅された。

ゴメン、陽。

僕はテーブルに置かれたプラスチック製のナイフとフォークを手にして、いざ食べようとしたのだが、その二つを友絵に奪い取られる。

「あの、友絵さん？」

奪い取ったナイフとフォークで、友絵がクレープを切り崩し始めた。

そして。

「…アキト、あゝん」

「あの、自分で食えるよ?」

「…あゝん」

「自分で食えます」

「…あゝん」

「ノーサンキュー」

「…あゝん」

「分かったよ！食べるから！だから空いた手で僕の太ももを撫でまわすな！！」

ぱく。

「…感想を五文字程度でどうぞ」

「美味しいよ」

「…良かった。ふふ…」

満足そうに微笑む友絵。

それはそうと。

指をくわえて僕を見ている魔法使いさんはどうするべきか。

僕の余りをあげようとしたのだが、声は一瞬でかき消される。

「真鳥さんっ！これをどうぞ！ご賞味ください！！」 「あ、テム、抜け駆けすんな！」 「真鳥さん！好きなだけ食べてください！！」 「あなたの笑顔のためなら！」 「リミットなんかありません！！」

凄い勢いで陽に皿を差し出す野郎ども。

やれやれだ。

「うんっ！ありがと♪」

いかにも作り物の極上スマイルを浮かべる陽。

もちろん、そんなことには気付かない野郎ども。

頑張れ。負けるな。

僕は気を取り直して、クレープを口に運ぶ。

うん。甘すぎなくて良い感じだ。

やっぱりクレープの生クリームは甘さ控えめがよろしい。

「き、桐山くんっ！」

「は、はい！？」

いきなり呼ばれて、ビックリ仰天。

見ると、D組女子の皆さん。

「あ、あの…お代わり、いくらでもあるから！」 「いっぱい食べてね！」 「ついでに私も味わって…」 「ちょ、何言ってるの！？」 「さ、相良くんは…」 「クレープあげなかったら悪戯し

てくれるかな？」

何のこっちゃ。

ひとまず、お礼は言っておこう。

「ど、どうも…でもお気遣い無く。ははは…」

我ながら情けない程のヘタレボイス。

時々、自分が嫌になるよ。

D組女子の皆さんは皿を持ち、わんこ蕎麦よろしくスタンバっていたが、陽と友絵が鬼のような形相で睨んでいたため、パラパラと散っていった。

人口密度の薄くなったテーブルの、手近な椅子を引き寄せて友絵が腰を下ろす。

「…ねえ、C組の教室で和哉が何やら始めてたけど、追加で企画でも始まったの？」

「ああ。そう言えば、企画を立ち上げるとか何とか言ってたな」

今更だよなあ。

宣伝もしろって言われたっけ。

するつもりないけれど。

知ったこっちゃねえよ、和哉の企画なんぞ。

アイツの為に動く義理も道理も無い。

「ねえアキト、私ちよつと気になる」

「僕は別に気にならないぞ。どうせロクなもんじゃない」

とは言え、先ほど和哉と話していた女の子が関わっているのかどうかは少し気になるが…

やっぱりどうでもいいや。

「和哉の企画は放っておくとしても、そろそろ撤退しようぜ陽。あんまり長居すると迷惑だ」

「ええ…もうちよつと居ようよ…せっかく食べ放題的な雰囲気なのに…」

そう言いながらも、渋々陽は立ち上がる。

「じゃ、ご馳走様。友絵」

「…うん…またどうぞ。あ、それから陽」

「うにゃ…何？」

ビビリながら陽。

友絵に対する恐れが見え隠れしている。

「…あんまりアキトにベツタリしてると、後が怖いよ?」

ジロリ、と乾いた瞳が陽をロックオン。

「わ…わかった…」

陽は緩慢な動作で頷いた…訳ではなかった。

「…なんて言うと思ったかあ!! 私とアキトは運命共同体、死んでも離れないんだからっ! 以上! さらにっ!!」

そう早口でまくし立て、陽は僕の腕を掴んで駆け出す。そしてマッハで教室からエスケープ。

このテンションは何処からやってくるのだろう。

僕は溜め息をまた一つ重ねる。

廊下を駆け抜けていくドラキュラと魔女。

風になびく黒色の衣装。

時刻はようやく午後一時を回った所。

まだまだ終わりそうにないハロウィーン。

そして形容しがたいこの祭りも、まだ続いていくのだった。

黒色ハロウィーン（後書き）

続きます。

玉虫色フェスティバル（前書き）

学園祭後編。

やや謎解きっぽくしてみたら、読みづらくなってしまいました。

特に後半の長台詞。

ごめんなさい。

玉虫色フェスティバル



友絵のクラスを出発してからは、また無銭飲食を繰り返した僕と陽。

学園内をグルグルと巡って、かなりの食料を腹に収めた。

全てを金額データとして弾き出したら、結構な額になるだろう。

そんなこんなで、消化を兼ねてダラダラと廊下を歩くドラキュラと魔法使い。

奈月ちゃんのクラスのサンドイッチ、美味しかったな：

ちなみに奈月ちゃんとは、我が郷土史研究部唯一の後輩である。

部員のほとんどが二年生。

僕らが卒業したらどうなるのかね。

奈月ちゃんの為にも、部員の確保は重要事項だ。

何の気なしに歩を進めていたら、二年C組の教室に戻ってきてしまった。

「興味は全く無いが、ちょっと入ってみるか」

「賛成でございやすっ!」

笑顔で同意する陽。

それにしても：何の飾りつけも無いな。朝と一緒の状態だ。ポスターの一枚や二枚、貼ってあってもいいのに。

ま、いいや。

僕は思考を止め、ドアを開く。

「お!？アキトに陽じゃないか。今更ご登場かよ!」

大声の主は、予想通り航平。

僕はリアクションを返さないままに、教室内を見渡す。

机と椅子が取っ払われた教室。妙にガランとしていて違和感がある。それだけでなく、室内にはそもそも人が少ない。

僕と陽を除けば、航平と和哉のみ。

企画、失敗？

：いや、航平が『今更』とか言ったから、既に終了したのか？そう考えれば、装飾の無いドアにも説明がつく。

「もう企画終わっちゃったの!？」

軽くショックを受けた様子の陽。

別にいいだろ：よくよく考えてみれば、自分のクラスの企画じゃないか。

その割には内容を全然把握していないけれど。

「ああ、ついさっきな。もう目的は果たしたから、続ける理由も無い」

和哉が椅子から立ち上がり、気だるげに背伸びをする。

「結局、どんな企画だったんだ？」

「狼男の出す問題に答えられたら豪華商品ゲットという単純な企画だ。お客には狩人の衣装を着てもらって、雰囲気演出」

和哉の口調は、やけに事務的だ。

「お前の企画にしては随分と毒気に欠けるな。それで、豪華商品って？」

「郷土史研究部特別ご優待券。『困ったら無料でご相談に乗ります』という夢のようなチケットだ」

くだらねえ。

超くだらねえ。

絵に描いたような詐欺。とんだ豪華商品があったものだ。

「アキト！もう企画自体は終了だが、問題に挑戦してみるか！？
へへへ…！」

狼男の不敵な笑みが、やけに腹立たしい。

「嫌だ」

でも、受けて立たない。

面倒なもの。

「あれ？ちょ…そんなつれないこと言うなよ…少しくらい構って
くれよお！」

半泣きで僕にすぎる航平。

ええい、鬱陶しい。

どんどん悲惨なキャラになっていくな、お前。

「私は受けて立つぞお！かかって来い航平！！」

「よし！じゃあ行くぞ陽。ついでにアキトも聞いとけ」

『問題。俺は狼男として十数年生きている。その中で、何千回と
ウサギを狩って来た。しかし俺は、今までに一度としてウサギを狩
り損なった事など無い。それは何故か、分かるかな？』

問題を言い終え、航平の顔には不敵な笑みが戻っている。

…その顔似合わないぞ、航平。

「ええ？何故って…何故？」

首を傾げて、思考中の陽。

元から物事を考えるのが苦手な陽。無理に頭を使うとオーバーヒートを起こすかもしれない。

「うう…分からない…何故って…んーと…えーと…『弱ってるウサギしか狙わないから』！？」

「ブブー。残念！違うんだなあ、これが」

実に嬉しそうな航平。

本当に小さなことで一喜一憂できるヤツだ。素直に感心する。

「悔しいい！ねえアキト、私のカタキを…！あのしょぼくれた仮装の航平をぶっ飛ばしてよ…！何だよあのヒゲ、意味分かんねえよ…！！」

メチャクチャ悔しがつている陽。

怒りの矛先が、問題じゃなくて航平に向いた。

…あ。航平のヤツ、またヘコンでる。大ダメージだなあ。

そこまでヒゲに思い入れがあるのだろうか？

予想外ながら、数秒の経過で航平は回復した。

またウザめのテンションに逆戻り。

「はっはっはっ。分からないかあ、そうだよなあ。正解率ほぼゼロだもんなあ。どうだアキトは？ん？ん？ん？」

見下したような笑みを貼り付けて接近する航平。

拳句の果てに肩まで組みやがる。

あまりに鬱陶しいので、僕は口を開く。

「『×××××から』、だろ？」

「ぐはあっ！！！！」

僕の言葉で、航平は叫び声を上げて吹っ飛ぶ。

そして床にうずくまって動かなくなった。

「にやるほど！さすがアキトっ！！」

陽のキラキラした目線が眩しい。

そして陽は、横たわって動かない航平に近づく。

「へんっ！思い知ったか、この負け犬めがあー！！うらうらうら…」

航平に降り注ぐ、陽のキック・レイン。

ドンマイ、航平。

「え、あ、ちょ…！痛い痛い痛い！！陽？陽さん！？痛いから！
！ごめんなさい、謝るから！痛い痛い痛い痛気持ちい…くくないで
す！！嘘です！もちろん！！だからもうやめてえええ！！！」

最初は大声で悲鳴を上げていた航平だったが、段々、声も聞こえなくなる。

そして大きく一回、ビクン！と痙攣したかと思うと、ピクリとも動かなくなった。

航平…安らかにな…アイスの棒でお墓を作ってあげよう。

恨むなら、このイレギュラーな学園祭の空気を恨め。

さて、この馬鹿は放っておくとして。

「和哉」

「ん？どうした」

「そろそろ教えてもらおうか。この企画の意図を。お前の発案なんだ、確実に裏があるんだろう？」

やっぱり、例の女の子が怪しい。

そこで僕は何かに気付く。

…あれ。確かあの娘って…

和哉は僕の質問には答えず、腕時計に目を落とす。

「…もうすぐ二時か…ボチボチ始まるな…」

「おい和哉、お前は何を言っている」

「講堂」

「はあ？」

マイペース全開な会話に、僕はついていけなくなる。

「ちよっくら講堂に行こうぜ。そうすれば、色々と楽だ」



講堂は窓もカーテンも閉め切られ、暗闇が支配していた。

唯一の光源となっているのは、舞台上の照明。

その舞台では、演劇部による出し物の真っ最中。

演劇部のオリジナル作品のようで、台詞や登場人物や衣装に覚えが無い。

ジャンルとしては童話なのだろうか、動物が話すのは基本設定のようだ。

僕と陽と和哉は、空いている席を見つけて適当に腰を下ろす。

…え？

航平？

誰だっけ、それ。

陽がどこかへ処分しに行ったきり、姿が見えない。

…さておき。

「演劇ね…。次第に事のカラクリが見えてきたような気がするぞ、和哉」

ここに来て、僕は例の女の子が誰なのかを思い出した。

和哉は愉快そうに唇を歪める。

「ほう。聞こうじゃねえか、お前の出した解答を」

楽しげに輝く和哉の目。

隣の陽に目をやれば、口を開けて爆睡中だった。

ノータッチの方向で。

僕は口を開く。

「じゃあ、始めるぞ。証拠も自信も、そして意味もない解答劇を。……まず、何でお前がいきなり企画を立ち上げようとしたのかだ。今日は学祭当日だぞ？いくら何でも急すぎる。それで、考えてみた。お前は今日になって初めて発覚した何らかの理由で、急遽企画を立ち上げることにしたんだ。それは何か。思い当たる節があるとするば、中庭の女の子。どこかで見たことがあると思ったら、演劇部の部長じゃないか。…そして狼男を相手にした企画。確か、お客は狛師の衣装で参加するんだったな。今になって考えれば、あんな問題に答えるだけなのに、衣装を変える必要は無いだろう。つまり、衣装を着せる目的は別にあった。あの企画は恐らく、何らかの理由で演劇部から出た欠員を埋めるために急遽行われた、オーディションだったのだ！……とまあ、こんなところか」

僕の解答を、和哉は黙って聞き入っていた。

そして、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「さすがアキトだな。大当たりの花マルだ」

「別に嬉しくないけどな…」

こんなことしても、何の得にもならないさ。

無駄に思考を使ってしまった分、マイナスかも。

「でも、欠員が出てたんだろ？オーディションなんて悠長なことやってる暇はあったのか？」

「おいおい。お前も気付いてるはずだぜ？この演劇における猟師のポジショニングに。さっきから舞台には出ずっぱりだが、台詞はまだ一言も発してねえ。つまりはチョイ役って訳だ。別にいなくても構わねえが、いるに越したことはない。そんな役だな。お前を推薦しようかとも考えたが、お前が出たら主役も食っちゃまいかねないチョイ役になるだろうからなあ。…本来なら、オーディションなんてやってる暇も無いし、適役に巡り合える確率も小数点以下だろうが、今回は別だ。衣装を着て、舞台栄えしそうなヤツを選ぶだけで良かった」

なるほどね…

一応納得はしてみるが、どちらにせよ効率の悪い行動だと思うな。

もっと他に良い方法があっただろうに。

終わってみれば、結果オーライだったみたいだが。

「あの猟師役のヤツには、例のチケットを渡してあるからな。郷研を訪れてくれる日を楽しみにしてるぜ。トラブル大歓迎だ」

例の豪華商品か。

お前の場合、他人の不幸が楽しいだけだろ。

「馬鹿な事を言うな。大体そんなことをしたら、ますます奇怪な部活になるだろうが。郷土史と研究はどこに行っただんだ!？」

「固い事を言うな。大体そんなルールに縛られてたら、ますます退屈な部活になるだろうが。スリルとロマンはどこにあるんだ!？」

うるせえよ。

目的が無いから退屈に繋がるんだ。

「さて。俺はそろそろ行くとするかな」

椅子から立ち上がりながら、和哉。

「演劇はいいのか？」

「ああ。頑張ってオリジナルに挑戦しようだが、こりゃ失敗だな。何なんだ、あの無駄に善人な仕立屋は。童話における仕立屋は、狡猾に描いてこそ価値があるってのに」

持論を展開し始める和哉。

激しく興味が無い。

「おいアキト。お前こそ、ハロウィーンは満喫したのか？もうそろそろ祭りも終わりだぜ」

僕は携帯を引っ張り出して時刻を確認。

現在、午後三時を少し回ったところ。

終わりが近づいてきた…か。

「ああ。十二分に楽しんださ。コイツはどうだか知らないけどな」

未だに眠りこけている陽の頭を軽く小突く。

「なかなか好評だったみたいだな。この企画。特にお前ら二人は大人気だったらしいじゃねえか」

「そうなのか？」

にわかには信じがたい話だ。

陽はともかく、僕は…ねえ？

「行く先々で絶賛の嵐だったぞ。こりゃ来年が楽しみだ」

「僕はもうやりたくないぞ」

「それはお前が決めることじゃねえよ。……多数決って素晴らしいよなあ」

「!？」

「じゃあな、ドラキュラ」

「あ、おい…！」

僕の声は、同時に巻き起こった拍手にかき消され、和哉に届くことはなかった。

広がっていく音の波の中、僕は今日という一日を思い返す。

長いようで、短いような一日。

めぐりめぐった、色々な出来事。

形容するには難しく。

言葉にするには複雑で。

ただただ、曖昧というのが総合評価。

そんなこんなで、色彩の当てられそうのないこの祭り。

あえて当てるとするならば、玉虫色以外にないだろう。

それでも楽しかったと、胸を張ることは出来ると思う。

例えばどんな色だったとしても、僕らの大切な日常に変わりはないのだから。

玉虫色フェスティバル（後書き）

ちなみに解答例としては、『ウサギを狩れるまで狩りをやめないから』。

企画者の和哉らしく、しょうもない問題。今回は色々と失敗だったと痛感しました。化学変化って、やっぱり起こるんですね…もう一度、ごめんなさい。

銀色フルムーン（前書き）

とりあえずの主要キャラは全員登場。

これから出番があるかどうかは、わかりませんが…

銀色フルムーン



学園祭が終わって、少しは落ち着きを取り戻しつつあった学園内。準備期間中から蔓延していた学祭オーラも次第に和らいでいった。そのせいでカップルの破局率が一時的に跳ね上がった、というのは別の話。

かく言う僕は、そんな毒に当てられることなく学生生活をそれなりに満喫していた。

僕は部室のパイプ椅子に腰掛け、しみじみと呟く。

「何だかんだで、今年ももう終わりか」

時は霜月、十一月。

カレンダーも残り二枚を残すところとなった。

「……心なしか、今年はアキトを弄り足りてない気がする」

不穏なことをボソッと呟くな、友絵。

「ゆ、友絵先輩…あんまりアキト先輩の悩みを増やさないであげてください…」

控えめに発言をするのは郷土史研究部唯一の一年メンバー。

ひの なつき
日野奈月。

長めのショートカットに、年齢不相応な小さな体つき。そして平均よりやや大きめな瞳は、問答無用で小動物を思わせる。

プチ人見知りだったり、自信なさ気なオドオドした仕草を見ると、もう無条件で守ってあげたくなる。ちなみに僕が選ぶ『妹にしたいランキング』堂々の第一位。もう可愛いなんのって。

「…そうやってアキトを庇って…高感度でも上げようとしてるつもり？」

チクリと突き刺さる友絵の一言。

奈月ちゃんは、そんな小賢しい策に打って出るような穢れた娘じゃないぞ。

「ち、違いますよ！私はただ…アキト先輩に平穏で幸せな生活を送ってもらおうと」

弱々しい声ではあったが、奈月ちゃんの発言に僕の心は大喝采。

「奈月ちゃん…君ってば、何て良い娘なんだ…」

可愛いだけじゃなくて、メチャクチャ良い娘。この性格破綻者ばかりの郷研に在籍していて、よくぞマトモでいられるものだ。もしかしたら裏ではもの凄い腹黒だとか、そういう嫌な設定はノーサンキュー。

感動のあまり思わず抱きしめたい衝動に駆られるが、そこは思いとどまる。

なので、頭を撫でる行為に落ち着く。

「あ…アキト先輩…」

顔を真っ赤にする奈月ちゃん。

照れた表情も、非常にイエイね。

「ありがと、奈月ちゃん」

「……いえ…むしろ…お礼を言いたいのは私の方で…」

「ん？何か言った？」

「な、なななな何でもないです!!」

更に顔を真っ赤にして、叫ぶ奈月ちゃん。

大丈夫でしょうか、この娘。

そんな僕らのやりとりを見ていた友絵が、またチクリ。

「…嬉しそうだね、奈月？」

「あ…えっと…その」

友絵の迫力を前に、完全にビビっている奈月ちゃん。

「…これは酷かもしれないけど…奈月は望み薄だと思うな……だってアキトは巨乳好きだし」

ニヤリ、と友絵は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「い、いきなり何を言い出すのかな友絵サン!？」

「…航平に、アキトの趣味嗜好を聞いたけど…それはもう……」

「アキト先輩…」

奈月ちゃんの引きつった笑顔が痛々しい!

「…自己主張が皆無な奈月のカラダじゃ、アキトは物足りないと思うよ?」

引きつった笑顔のまま、奈月ちゃんは硬直する。

そして段々と俯いて、視線を床に落とす。

ああ…視線だけじゃなくてテンションもガタ落ちのご様子。

「な、奈月ちゃん、そんなに気を落とさずに」

拙い言葉で慰めようと試みるが、どうにも勝手が分からない。

すると、友絵が立ち上がって僕に近づいてくる。

「…その点、私ならアキトを満足させる自信があるけどな…」

体を密着させ、耳元で友絵が囁く。

背中に当たる殺人級の感触が、僕の思考を鈍らせる。

「ええい、やめろ！お前は他人に危害を加えるのがそんなに楽しいか？」

「…当然…だって、アキトは私のオモチャだもん…それに、私のオモチャに手を出す後輩ちゃんにはお仕置きが必要でしょ？」

そう言って、友絵は嫌らしげに微笑む。

奈月ちゃんは頭を抱えてビクビクしている。

「友絵、頼むから奈月ちゃんには手を出すな…本当、見てるのが辛い」

「…それは『僕になら何をしてもいいぜ！』っていう意思の表れ？」

「断じて違う！！」

にわかにヒートアップする部室。

すると、立て付けの悪いドアが無理矢理に開く。

「やっほう♪皆さんお待たせ致しましたっ！ようやくご登場の陽ちゃんのだあ！」

既にカオスな流れの部室。

陽の登場で更に壊滅的な流れになるのは確定だ。

「…随分遅かったね…今まで何してたの？」

「ふふふ…飽くなき知的好奇心を埋めるために、勉学に励んでいたのです！」

「いやいやいや、正直に居残り食らってたって言え」

勉強嫌いな陽が、課題提出の締め切りなんて守るはずがない。

溜まりに溜まったツケが回ってきたのだ。

いくら生徒の自主性を重んじる我が学園でも、限度というものは存在する。

ここでちょっとした裏話。

昨夜のことだ。僕が自室でくつろいでいると、いきなり陽が乱入してきて『課題の処理を手伝ってプリーズ！』と泣きついてきた。

仕方なく手伝ってやったのだが、とても一晩で終わる量ではなく、日付が変わった頃で見切りをつけ、今日に持ち越す形となった。

現在時刻は午後六時を過ぎたくらい。

今までかかったのか…いやそれ以前に、本当に終わったのか？ま

さか今日も手伝えとか言わないだろうな？

我ながら嫌な想像を巡らせていると、またもや部室のドアが開く。

ひょっこり顔を出したのは、二年C組担任の塚田^{つかだ}先生。

ボサボサ頭にヨレヨレのスーツ。推定三十代前半。外見通りの性格をしているが、決しているいい加減な教師ではないことを付け足しておこう。ちなみに僕は、比較的好感をもっている。

「どうしたんですか？塚田先生」

「おう桐山。真鳥を見なかったか？アイツめ、課題を放り出して逃走しやがった」

僕は室内をぐるりと見渡すが、陽の姿は無い。

どこに隠れた？

「さっきまでここにいましたけど…姿が見えませんね」

…あの本棚の後ろが怪しいのだが…

「そうか。見つけたら『ギリギリに妥協して、課題は明日まで待つてやる』って伝えといてくれ」

本棚から目を逸らさずに言う塚田先生。

「了解しました。伝えておきます」

「おう。じゃ、気をつけて帰れよ」

そう言い残し、塚田先生は去っていく。

数秒後、陽が本棚の後ろからのっそりと姿を現す。

「ふう…何とか誤魔化したねっ！」

いや、普通にバレバレだったぞ。

「…課題、まだ終わってなかったんだ…」

呆れたような友絵の視線。

「が、頑張ってください…」

戸惑いながらも奈月ちゃんの応援。

「もう課題の話はナシ！！帰るとしましょうか！」

腕を突き出して陽が宣言する。

賑やかな声は途切れないまま、僕らは部室を後にした。



時は流れて、ただ今の時刻は午後八時を回っている。

部室を出た時点では直帰コースの流れだったが、課題がまだ残っ

ていると耳にした僕は、そのまま帰る訳にはいかなかった。

このままではまた甚大な被害が…と己の睡眠不足を案じ、友絵と奈月ちゃんを無理矢理引きとめ、手伝ってもらうことにした。

場所は郷研行きつけの喫茶店。

友絵は文句を言いながらも、良い仕事をしてくれたし、奈月ちゃんは微笑ましくチマチマとペンを走らせていた。

おかげで、今夜の僕の安眠は保障されたのだ。

やりい。

テクテクと、家路を陽と二人で歩く。

頭上には、明るく輝く銀色の月が煌めいていた。

陽は歌いながら歩を進める。帰り道にピッタリの曲だった。聞いていたら自宅が恋しくなってきたじゃないか。

「これに懲りたら、もっと計画的に勉強しろよ」

「はっはっはっ。そいつぁ無理な相談だぜ、ダンナ」

誰だよ、お前。

「付き合わされる僕の身にもなれ」

「にしし…そうやって文句ばかり言ってるけどさあ、何だかん

だで手伝ってくれるんだよねえ♪アキトは優しいなあ」

言われてみれば確かにそうだ。

いつも、結局は手伝う羽目に陥っている。

「そうだな。無理して手伝う必要なんてどこにも無いよな…」

「あれえ？何か様子がおかしいよアキト！？いきなり冷静な思考回路を持ち出さないで！」

マジで慌てている陽。

お前、自分一人の力で片付ける気、無いよな。

「タダとは言わないからっ！ちゃんとお礼するからっ！」

「お礼？」

「うん……私の体で…」

ワザとらしく頬を染めて陽が言う。

いらねえ。

超いらねえ。

「えへへ…ほら、今夜は満月だし…私の前だけでは狼さんになってもいいゾ♪」

バチリ、とウィンク。

あ、今ちよつと殺意が湧いた。

普通に大人しくしてたら可愛いのかな…

でも、まあ。

口を開けば文句ばかりだけれど。

こうやって、陽と過ごしていく日常が、たまらなく愛おしいのも事実で。

もちろん、本人が聞いた日にゃ狂気乱舞して、赤飯でも炊いてしまっただろうから自粛。

それに照れだとか、プライドだとか、色々なものが邪魔をする。

だから、少しだけ。

「……ありがとな」

陽に聞こえないように、僕は呟く。

「え、何か言った？」

「何でもない」

「ええ、気になるじゃんかあ！何て言ったの？」

「何でもないって」

「……分かった！『…お前が欲しい』！！」

「言ってねえよそんなこと！！」

夜の住宅街に響く、騒がしい声。

次第に、冬の匂いが濃くなっていく。

渴いた空気を吸い込んで。

僕は夜空を見上げた。

丸く、大きく、銀色の満月が、僕らを見ていた。

銀色フルムーン（後書き）

蛇足ではありますが：

陽が帰り道に歌っていた曲は、スムルースの『帰り道ジェット』。

絶好の帰り道ソングです。

心が温かくなります。

日常って、いいですねえ。

緑色クリスマス



吹く風は刺すように冷たく、苛立たしげに虚空を睨みつけてみる
が当然何の効果もなく、虚しさとするせなさが増大しただけだった
ので、そこで止めにする。

「ジングルベール、ジングルベール、鈴が鳴るう♪」

陽気にクリスマスソングを口ずさみながら、ご機嫌の陽。

頭に乗せた赤と白のサンタ帽が無駄に似合っている。

今日は十二月二十四日。

俗に言うクリスマスイブである。

寒いだけで、雪が降る気配は全くない。

ホワイトクリスマスは望めそうにないな。

早くも毎年恒例となった（まだ二回目だが）郷土史研究部主催の
クリスマスパーティー会場として、今年は我が桐山家が選出された
のだった。

早くも冬休みボケ真っ最中の陽を叩き起こし、僕と陽は買い出し
に出かけた。

それにしても…よりによって、ウチかよ。

去年みたいに、友絵の家でいいじゃないか。広かったし。

僕の家だって、バカ騒ぎできるほどの広さが無いとは言わないが、それだったら隣の真鳥家でいいじゃないか。

アイツが本気で騒いだら、確実に我が家は終わる。それだけは言える。

…桐山家崩壊の危機をリアルに心配中の僕。

大丈夫だとは思うけれど。信じているけれど。

「あのさ、あのメンバーに我が家が耐え切れと思うか…？」

「え？アキトでしょ、私でしょ、和哉に友絵に奈月…それとバカ。六人くらい楽勝だって！」

いや、人数の問題ではなくて。

「ま…僕がストッパーになるしかないよな…」

頑張ろう。死なない程度に頑張ろう。

ビニール袋を握る手に、僕は力を込めて誓うのだった。



家に到着した後は陽とコツコツ準備をし、時間は容赦なく過ぎていった。

ただ今の時刻、午後四時十分前くらい。

そろそろ指定の時間か：

などとボンヤリ考えていたら、インターホンが鳴る。

「お。来たか」

僕は玄関へ向かい、ドアを押し開ける。

「こ、こんにちはアキト先輩…」

「…はろー」

「ういっす。三名様ご到着だ」

奈月ちゃんに友絵、そして和哉がご到着。

「おう。上がれ上がれ」

僕は三人をリビングへ招き入れる。

「おっ！いらっさい！！……これで全員集合だね！さっそく始めますかっ！」

陽の発言はさり気に酷いものだったが、あえて誰も突っ込みを入れず、それぞれテーブルの適当なポジションに座っていく。

え？

航平？

別にいいんじゃない？

大体アイツ、郷研ですらねえし。

本当は郷研の先輩二人も誘ったのだけれど、仲良くお二人で過ごすそうで。残念、無念。

僕はグラスにジュースを注ぎ、全員に回す。

すると隣の陽が、意味ありげな表情で僕を小突く。

「ほらっ、今日の幹事はアキトだよっ！何かヒトコトお願いしますっ！」

ハッキリ言って面倒だったが、仕方ないか：

「えーと、それじゃ…今日はお忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます」

「おいおい、カタイゾアキト」

和哉が突っ込みを入れてくる。

「…ぐ…だから、今日はせいぜい、飲んで食って騒いで、今日という日を楽しんでください！メリークリスマス！！」

『メリークリスマス!!』

明るく楽しいな雰囲気です。パーティーは始まった…のだが。

何やら玄関が騒がしい。

大方予想はつくが…

「おいしい! アキト! 何これ!? 何で俺が到着してないのに乾杯しちゃう? おかしいよな? おかしいよな、これ? そうやって俺を除け者にして楽しんでるのか? お前らは! ヒドイよ!」

不協和音の塊と化して現れたのは、バカこと航平。

当然、一同からは冷たい視線。

特に女性陣からは生ゴミを見るような目で見られている。

「…どちら様ですか?」

友絵の先制攻撃が炸裂する。

「え…ちょ…」

航平はグラスを片手に固まる。無駄に爽やかな笑顔が今は滑稽だ。

そりゃあキツイよな…他人扱いは。

「アキトの知り合い? この出来損ないのニワトリ。見てるだけで

気分を害します」

陽も絶対零度の視線と声で応じる。

お前も結構、容赦ないよな。

「う、うわあぁん！！奈月！何かあの二人怖いよ！！」

航平は大声で喚きながら、奈月ちゃんに迫る。

すると奈月ちゃんは。

「ふ…ふえ……」

完全に怯えて、半泣き状態。

潤んだ瞳が僕の庇護欲をマックスまで刺激する。

「おいコラ航平！奈月ちゃんが怖がつてるだろ！離れる馬鹿野郎
！！」

僕は航平に蹴りを入れ、奈月ちゃんから引き離す。

それに陽と友絵が群がって、殴る蹴るの制裁を加え始める。

ドンマイ。お前、まだ何もしてないのにな…

「あ…アキト先輩…」

「よしよし…怖かったね、奈月ちゃん…」

「あ…あう…えと…その…」

軽く奈月ちゃんを抱きしめるようにして、髪を優しく撫でてあげる。

それを見ていた約二名が、猛烈抗議。

「ちょっと奈月！アンタどさくさに紛れて何て羨ましいことを！」

「……言い残すことは無い？」

陽は悔し泣きしそうな表情で奈月ちゃんに詰め寄る。

そして友絵はマジで目が据わっている。怖い。

「え…えと…その…」

本気でビビリ始める奈月ちゃん。

「アキトお！私のことも抱きしめてよお！！何で奈月ばかりなのさあ！！」

いやいや。

奈月ちゃんは可愛いもん。

「…奈月より、私の方がボリュームあるよ？今夜は…アキトのサシタクロスになってあげる」

いやいや。

そんな犯罪の香りがするサンタは要らないよ。

つか、何だ。

このいつもの流れ。

「おいアキト」

不意に和哉が呼びかける。

「どうした」

「このチキン美味いぞ。ほれ」

「……………」

和哉は恐ろしくマイペース。

僕も、見習おうかな。

苦笑を浮かべながら重い体を動かす。

ピクリとも動かない航平、言い争う陽と友絵、そして奈月ちゃんを横目に、椅子へ腰を下ろし、チキンを切り分け口に運ぶ。

「………美味いな」

肉嫌いの僕でも素直に美味しいと感じた。

買ってきたのは陽だけど。

「だろ？」

「ああ」

騒がしく、やかましく、それでいていつも通りの空気。

クリスマスイブが、ゆっくりと過ぎていく。



現在時刻、夜の八時。

現状は…酷いものだった。

飲んで、食って、騒いで、散らかして。目の前の光景は、まさに地獄絵図。

航平は未だ倒れたまま。

和哉と陽は眠りに落ちている。

友絵と奈月ちゃんは僕の両側に陣取り、妙なテンションになっている。

「…だからねアキト…月にはウサギがいて…餅をペッタンペッタ

ンと：神様から与えられた試練というか罰ゲームというか……そこにリアリティは皆無だけれども：」

首筋にすがりついて、ひたすら意味不明な話を延々と語り続ける友絵。

「アキト先輩は意地悪です！どうして友絵先輩ばかり構うんですか！？たまには私を見てくれたって良いじゃないですか！」

僕に背中を預けて寝そべったまま、ひたすら叫び続ける奈月ちゃん。

パーティはいつの間にか、普段からは想像もできないほどシュールな光景に変わっていた。

まるで酔っ払いじゃないか。

言っておくが、酒なんか準備しちゃいない。何らかの暗黒物質が二人をこうも壊れさせたのであろう。

そういうことにしておいて。

「…聞ってるのアキト？」

「聞ってるんですかアキト先輩！？」

…誰か助けてくれ。

このままではいかんと思い、僕は二人を引き離して立ち上がる。

その際、二人の不満が爆発したのは言うまでもない。

両手を叩きながら、声を張り上げる。

「はい、そろそろパーティはお開き！各自、帰宅の準備を開始しなさい！！」

僕の声で目を覚ました陽が頬を膨らませて言う。

「ええ！？ヤダ！今日はアキトの部屋にお泊りだもん！！」

こっちも嫌だわ！

勝手に宿泊プランを組み立てるな。

「…ずるい…私もアキトの部屋に泊まる…」

ボンヤリとした声のまま、僕の足にしがみつく友絵。

大丈夫か、お前。

「何を言ってるんですか二人とも！アキト先輩が嫌がってるじゃないですか！！」

おお。

奈月ちゃんがマトモに戻ってきた。

いつもより強気な感じが頼もしい。

「だから私が代表して泊まります!!」

何故!?

どうしたらそこまでぶっ飛んだ結論に行き着く?

ぶっちゃけ、一番重症なのは奈月ちゃんじゃなかろうか。

「いつの間にやら大変な事になってるな」

僕が軽く絶望感に浸っていると、和哉が頭を掻きながら冷静な声で呟く。

「なあ和哉、友絵と奈月ちゃんのこと頼んでいいか? もう僕じゃ手に負えん」

「おう、任せとけ。責任を持って家まで送り届けてやる」

「あ、それとその死体の処理も」

「ああ、すっかり忘れてたな」

ははは…と無機質な笑い声が響く。

友絵と奈月ちゃんの背中を押しながら、和哉が玄関へ向かう。

僕は例の死体を引きずりながら玄関へ。

「сойじゃ、またなアキト。片付け手伝わなくて悪いな」

「いやいや。その二人の護送の方が明らかに重労働だ」

そこまで壊れた二人を始めて見たぞ。

しかも、まだ騒いでいる。

「…アキトの部屋に泊まるのに…和哉…邪魔しないでよ…」

「ちょっと和哉先輩！離してください！アキト先輩が私を呼んでるんです！！」

僕は軽く手を振って、三人プラス一体を見送った。

頑張れ、和哉。

さて…と。

後は陽か。

「あれえ…もうみんな帰ったの？」

「ああ。もう潮時だった」

「とか何とか言っちゃってえ！ホントは私と二人っきりになりたかったからでしょ！？もうっ、素直じゃないなあ！！」

そこまで話せるなら、コイツは大丈夫みたいだな。

「バカなこと言ってないで、お前もそろそろ帰ったらどうだ？特別に片付けは免除してやるから」

「…うう…片付け手伝うから一緒にいようよお…」

寂しげな表情で上目遣いを繰り返してきた陽。

少しだけグツと来なくも無かったが、割合どうでもいい。

「…寂しいんだよ…イブだったのに兄貴は仕事だし…こんだけ騒いだ後、誰もいない家に帰ると…虚しさが倍以上になっちゃう…」

俯いて呟いた陽の声は、得意の演技でも何でもなく、心からの呟きだった。

せつかくのイブなのに、仕事が忙しいのはどこの家庭でも共通なのだろうか。

ウチの父さんも、遅い。

仕事が長引いているのかな。

……仕方ねえなあ、もう。

僕は溜め息を一つ吐き、俯いたままの陽の頭に手を乗せる。

「分かったよ。それじゃ…家族待ちの寂しい者同士、ささやかではあるが、温まるとするか」

何気なく言った言葉だったが、陽は異常な反応を示す。

「人肌!?! 人肌!?!」

「アホか!?! コーヒーでも淹れようかって話だ!?!」

「またまたあ。照れるな照れるな、近う寄れ♪」

嫌らしく笑いながら手招きする陽。

「…さて。会話でヒートアップしたことだし、そろそろお帰り頂こうかな…」

「ちょ、あれえ? コーヒーは? 温もりは幻に!?!」

「そろそろ、擦るマッチが切れたんじゃないか?」

「何の話!?!」

陽は笑う。

僕も笑う。

寂しい空気も、冷たいモヤモヤも、こうやって下らない話で笑い飛ばしてしまえばいい。

一人でも、自分を温めることは出来るけれど。

二人なら、一人よりも温かくなれる。

こうして温もりを共有できるのは、そんな人がそばにいるのは、とても幸せなことだと思う。

窓の外には真っ黒な空。

そして輝く白い星。

ホワイトクリスマスには程遠くても、特別な日には変わらない。

いいじゃないか、こんな風に緑の映えるクリスマスだって。

コーヒートの湯気越しに見えたクリスマスツリーが、誇らしげに胸を張っていた。

鈍色スカイ（前書き）

本来は予定していなかった話。
なので、ちょっと軽めな仕上がり。

鈍色スカイ



振り返ってみればあつという間の一年だった、そんなお約束の決まり文句で始めるのは何だか癪だが、実際そうなのだから仕方ない。

一年って早いなあ：

「今年も無事年を越せそうで何よりだねえ」

コタツに体を潜り込ませ、ふにゃふにゃした声を発する陽。

さも当然のように遠赤外線の温かみに触れていやがるが、ここは僕の部屋だ。

本日は大晦日。

大掃除を済ませ、綺麗に片付いた僕の部屋は、新年を迎える準備万全。

そこへ乱入してくる陽。

コイツの辞書に、遠慮と容赦の文字は存在しない。

「なかなか晴れないねえ。こりゃ初日の出は怪しい感じ」

ミカンを手に取り皮を剥きつつ、陽は外に目をやる。

部屋の窓から見える空は、明らかな曇天。

厚く垂れ込めた鈍色が気分を憂鬱にさせる。

「だな。別に初日の出が見えようが見えまいが、関係ないけど」

そんな予定は無いし、寒空の下で日の出を待ちわびるようなポジティブさを、今の僕は持ち合わせていない。

中学時代はアクティブな子だったのに：今や引きこもり気味のダメ人間。

：人生ってこんなもんだよね。

「アキトが行くって言えば、私は喜んで出かけるけど：はい、あゝん」

差し出された陽の手からミカンをもぎ取り、自分の手で口へ運ぶ。

言うまでもなく陽は不満そうな表情。

「残念だが、僕はコタツの魔法にかかって脱出不可能だ。俗に言うメロメロですな」

「そんなコタツに嫉妬しちゃってる私って可愛い？」

陽は頬に指を当て、首を傾げる。

そんな作り物の笑顔に心を揺り動かされるほど、僕は安い人間ではないつもりだ。

「初めて会った時は可愛かったのにな。今は悲しい現実だけが広がっている」

「過去形で言わないでよ！あの頃のほとぼしる愛情は何処へ！？」

「愛情がほとぼしったという記録は、僕の脳内に残されていないのだが」

「…『君みたいな可愛い娘がお隣さんだなんて、少しだけ神様を信じてもいい気がしてきた』」

ぐはっ！！

僕は顔面が刹那を待たずに赤く染まっていくのを感じる。

そんな、古傷を抉るような台詞を持ち出すな！！

「覚えてる？私と初めて一緒に登校した時、アキトがキラースマイルに乗せて吐いた台詞♪」

「う…う…」

「あの頃のアキトは優しかったなあ…て言うか、甘かったのかな？私のハートは盗難に遭って大変なんだよっ！」

満面の笑みで、陽は嬉しそうに語るが、僕はもう崩壊寸前。

あの頃の陽への接し方は、過去の汚点の最たるものだ。

陽の内面を見抜いていれば、あんな接し方はしなかったのに：

後悔ばかりが渦巻いていく。

もう、ふて寝してやる…！

僕はコタツの中で足を広げ、ゴロリと寝転がる。

「え。アキト、寝ちゃうの？つまんない…！！この下らない年末特番を一人で見るのは拷問だよお！！」

騒ぐ陽の声にフィルターをかけ、僕は睡眠モードに入る。

次第に、その声も薄らいでいった――

「…ん…よく寝た」

何故だか、目覚めは割りとスッキリ。

寝転んだまま首を僅かに起こし時計に目をやると、日はすっかり暮れていた。

実に六時間以上は眠りに落ちていたことになる。想像以上に過去の傷は甚大なようだ。

「あれ？」

そこで、不意に違和感が僕を襲う。

温かいはずのコタツなのに、嫌な寒気が：

「ってオイ！！」

顔を右に傾けると、そこには陽の嬉しそうな寝顔があった。

僕の体にしがみつき、実に可愛らしい寝顔を晒している。

ったく、コイツは。

失意のあまり、陽の目の前で爆睡してしまうという己の失態を嘆いたが、もう遅い。

他にもっとおどましい行為に及んでいないか、目を覚ましたら問い詰めてやろうかと考えたが、聞くのが怖いのでやめる。

次に陽のホールドを解こうと試みるも、挫折。

ガッチリと抱きつき、ビクともしない。一体どこにここまでの力があるんだ。

起こそうとも思ったが、この憎らしいまでに可愛らしい寝顔が見れなくなるのは、少々惜しい。

僕は苦笑を浮かべ、陽の頬を撫でる。

心なしか、寝顔が一層嬉しそうに微笑む。

僕もつられて笑顔になる。

「……色々あったけど、今年一年お疲れ様。お前のおかげで、結構楽しい年になったよ。来年も、よろしくな」

きっと、面と向かっては言えない素直な言葉。

ちょっと卑怯な気もするけれど、僕の安っぽいプライドがいつまでも邪魔をしている。

来年こそは、自分の気持ちに素直になりたい。

なれるといいなあ。

年の終わりは、予想外に静かで穏やかに。

僕らに酷く不釣り合いな、それでいて酷く相応しい平穏と平凡。

陽が目を覚ましたら、年越しソバでも食おうかと思う。作るのは陽だけ。

下手に睡眠をとってしまったせいで、きっと寝付けないんだろうな。

それもまた、いいか。

陽がいれば、どうせ夜通し騒ぐことになる。

そして、夜が明けたら初詣に行こう。

天気は曇りかもしれないけど、構いやしない。

陽がいれば、太陽だって顔を出す。

そう、陽がいれば。

陽がいれば。

楽しい日々が続いてくれる。

そうだろう？

陽。

灰色ラビット（前書き）

何だか重い話になってしまいました。
それにしても、短くまとめるのは難しいですね。

灰色ラビット



冬休み明けで憂鬱なテンションを纏った一月の天気は、音もなく降り続く雪。

年末には一度としてお目にかからなかったが、年が明けた途端、残雪が溶ける間もなく新しく降り積もっていく。

ここら辺一帯は、雪国と呼んで差し支えない。それなりに雪も降る。盆地なので夏は不快極まりなく、山に囲まれているため、冬は風が刺すように冷たい。住むのに適した地域とは言えないだろう。

街は一面の銀世界と化し、どこことなく静寂に満ちている。雪の白さで目が痛い。

テクテクと、陽と一緒に学園へと向かう。

冬。

年の終わりと始めを司る季節。

僕は、冬という季節にあまり良い印象を持っていない。

それこそ昔は、冬も雪も氷も大嫌いだった。

今でも、思い出すだけで背筋が冷たくなる。

あれは、僕がまだ五才のガキだった頃の話。

もう十二年も前の事になる。

ある冬の日、僕は母さんと買い物に出かけていた。

前日の大雪のせいで、見渡す限り真っ白。道も凍って、テカテカだったのを覚えている。それが楽しくて、はしゃぎながら歩いていたことも。

僕は雪が好きだった。

氷が好きだった。

冬が、好きだった。

白くて綺麗だし、遊びのバリエーションだって広がる。普段の味気ない道だって、スケートリンクに早変わり。そして何よりも、繋ぐ手の温もりが、他のどの季節よりも心地よかったから。

だからその瞬間、僕は何が起こったのか分からなかった。

耳に響いたのは、頼りなく空回るタイヤの音。そして鈍い衝突音。

体を感じたのは、軽い衝撃。そして冷たく凍った道路の感触。

僕に覆いかぶさったまま、動かない母さん。

感じた温もりは、残酷なまでに優しくて。

状況が飲み込めないまま、僕の意識は白と黒の世界に落ちていった…

目を覚ました時は病院のベッドの上。

医者と看護師と、酷く弱々しい表情の父さん。

痛いところはないか、と貧相な顔の医者が問いかけた。

首を傾げながらも僕は頷く。

すると父さんが、僕の肩を掴んで口を開いた。その瞳は、涙で濡れて真っ赤だった。

目撃者の証言によれば、僕と母さんが渡っている横断歩道に一台の乗用車が突っ込んできたのだと言う。

目の前の赤信号。急ブレーキで車体はスリップ。スピードを殺しきれずに凶器と化した車。

母さんが庇ってくれたおかげで、僕はほぼ無傷だった。

この車は県外ナンバーの旅行者で、履いていたのはノーマルタイヤ。

混乱するばかりだった僕にそこまで理解できる訳がなく、口から出たのはこの言葉。

お母さんは？

父さんは一層辛そうに唇を結ぶ。

ここまで辛そうな表情の父さんを見たのは、初めてだった。

僅かに言いよどむ父さん。舌に乗せた言葉を、吐き出すのが怖いかのように。

その答えを耳にした僕も、脳が咀嚼して理解に要した時間は計り知れない。

デタラメだと思った。

作り話だと思った。

冗談だと思った。

嘘だと思った。

そんなはず、ないから。

母さんは、いつも笑顔で優しくて。

どんな時でも、温かく僕を見守ってくれていたのに。

しばらくして、車の運転手が僕と父さんに謝罪にやって来た。

ひたすら頭を下げ、謝罪の言葉をべらべらと吐いていたが、僕は何も感じなかった。

僕の中に込み上げていた感情が何だったのか、今ではもう思い出せない。

そしてひとつだけ、決めたことがあった。

母さんが最後にくれた温もりを忘れないようにすること。

心の涙も、乾かせるように。

悪いのは運転手だって分かってはいるけれど、それでも。

当時の僕は冬を恨み、いつそのこと、こんな季節無くなってしまえばいいとさえ感じた。

この日この時この瞬間から、僕は冬が大嫌いになった。



久しぶりに昔を思い出すと、それなりに小さな痛みがチクチクと駆け巡ったりするけれど、悲しみに暮れてばかりいた幼い僕はもういない。父さんは僕を男手ひとつで懸命に育ててくれたし、今まで育ててくれた感謝の思いだって尽きることはない。

過去の痛みを乗り越えて、今の僕がある。

それはきっと、陽がいてくれたから。

一年前の冬。

陽と出会って初めての冬。

外で雪を眺めながら、僕は陽に母さんの事を打ち明けた。

僕の話に耳を傾けていた陽は、やがて泣きそうな顔で口を開いた。

『…アキト…辛かったんだね。寂しかったんだね』

『……………』

『実は私も、冬って良い思い出が無いんだよね。中学の時かな、付き合ってた人がいたの。その人のことが好きで好きで好きで。自分でも舞い上がってたんだと思う…重いって言われちゃったんだよ。こっぴどく盛大に振られちゃった』

『……………』

『もう目の前が真っ暗になってね。しばらく廃人みたいな生活を送ってた。実を言うと自殺を考えた時期もあったの。伝わりすぎた気持ちってというのは、重荷以外の何物でもないんだよね』

『ヒナ…』

『あ、えっと、私が言いたいのはそんなことじゃなくて！そう、過去をいつまでも引きずってちゃいけないってこと！…私も、アキトに会えて変わったから。いっぱい大切なものをアキトに貰ったから。だから、今度は私が…』

陽はそう言うと、立ち上がって雪をかき集め始めた。

頭上にハテナマークが飛び交う中、やがて陽は僕の前にあるものを置いた。

『ほらアキト。どんなに傷だらけだって、痛くたって、苦しくたって。二人で寄り添えば、きっと頑張れるよ』

夢げに、弱々しく。

いつもとは全く別物の笑顔を見せる陽。

それでも、伝えたい気持ちは十分に僕の心を満たした。

目の前に置かれた二体の雪ウサギ。

雪が少ないせいもあってか、純粋な白色とは言えない。

石で作られた目はお互いにひとつずつ。葉っぱで作られた耳もひとつずつだった。

傷だらけのウサギ、か。

弱々しくて寂しがり屋の僕たちには、お似合いなのかもしれない。

中途半端に汚れた色も、皮肉っぽくて笑える。

中途半端に綺麗なより、相応しいと思う。

内心で苦笑しつつも、僕は思わず立ち上がり、陽を抱きしめていた。

『あ、アキト！？こ、こここここここここここれは…』

顔を真っ赤にする陽がやけに可愛かったのを覚えている。

『ん？冬だしな。寒いしな。このウサギに倣って温まるのも悪くない提案だと思うんだが』

『そ、そそそそそそそそそうですねえ！！』

挙動が不審な陽をよそに、僕は小さく呟く。

『…温もり、か』

『アキト？何か言った？』

『いや、傷だらけのウサギだって良いもんだなと思って』

こうやって傷を癒しあえるのなら。まだまだ捨てたもんじゃない。

『知ってる？ウサギって年中発情期なんだよ！アキトもムラムラム！？』

『お前は今までの流れを、一瞬にして木っ端微塵にしたな』

溜め息を吐きつつも、僕は笑顔になった。

そうだよな、シリアスな空気は僕らには似合わない。

こうやって下らないことで笑い合ってる方が断然ピッタリだ。

でも、それでも。

この日の事は、いつまで経っても大切な思い出として心に刻み込まれるだろうと、僕は何となく思った。



やれやれ、朝から重い話を持ち出してしまった。

降りしきる雪が記憶を呼び起こすのだろうか。

ドサ、と道端の木に積もった雪が落ちる。

ちなみに僕と陽は、一本の傘に無理矢理入っている。家を出るときは既に雪が降っていたが、陽が『傘が無い』などと誰も騙せそうにない嘘をつき、僕の傘に強引に入ってきたのだった。

「雪が降ると思ひ出すねえ。去年のこと」

「まあな。あの時のお前の言葉、結構感動したのを覚えてるぞ」

「どうしたの！？アキトが珍しく素直だよお！これは、とうとう私たちのゴールインも近いってこと！？」

一体何を言っているのだろう、このハイテンション娘は。

相変わらず疑問は尽きない。今だって、頬に手を当てて体をくねらせている。第三者が見たら明らかに不審者だ。

なので、放っておくことにする。

僕は一人で歩き出した。

「って、アキト！何で行っちゃうの？放置？放置ですか？そういうマニアックな趣味も持ち合わせていたとは、侮り難し…！」

理解不能な発言をしつつ、陽が再び傘に侵入してくる。

雪色の街と、寄り添って歩く僕ら。

共有するのは、ささやかな温もり。

記憶の片隅には、あの日の灰色のウサギ。

傷だらけでも、灰色でも。

僕らは歩いていける。

不意に、冬の色が濃くなった気がした。

褐色ドラマチック（前書き）

前回と対照的に軽めのノリ。
二月と言え、あの行事。

褐色ドラマチック



二月も半ばが近づくと、学園の空気は急に騒がしいものに化する。

バレンタインデーなる、チョコレート会社による陰謀の日が刻一刻と近づいてきているのだ。

これはもはや、戦争と言っても過言ではないだろう。

例えば廊下を歩いている時。

「き、桐山くん！」

「ん？」

不意に呼び止められる。

声のした方に目をやれば、知らない女の子。しかもかなり可愛い。色白の肌と漆黒の髪が素晴らしいコントラストを生み出している。

「ちょっと話があるんですけど…いいですか？」

頬を染めてそんなことを言うじゃありませんか。

これは、ひょっとしてひょっとしちゃうのか！？などと甘い希望が不意に顔を出すのだが。

「ちょっと待ったあ!!」

廊下に轟く透き通った声。

全力疾走で現れたのは陽だった。

すごい形相で、僕と女の子の間に割って入る。

「…アキトに何の用？事と次第によっちゃあ、地獄を見ることになるよ？」

言葉にするにもおぞましい、ドロリとした目つきで女の子を睨みつける陽。

「え、あ、あの…」

もちろん相手の娘はビビリまくり。

「行くよっ！アキト」

彼女を完全に黙らせると、陽は僕の手を取りグイグイと引いていく。

階段近くまで来たところで、ようやく陽の歩みも止まる。

「あのなヒナ。お前は何を考えているんだ」

「アキトこそっ！警戒が足りないよ！いい？この時期の女の子はケダモノなの！迂闊に優しさを見せたら、有無を言わず食べられ

ちゃうんだからねっ!!」

ずい、と顔を寄せて叫ぶ陽。

近いぞ。そして声が大きい。更に言うなら唾を飛ばすな。

「そうか。この時期の女の子は危険か。なら仕方ない、お前とも距離を取らざるを得ないな」

僕は三歩くらい陽から離れる。

つまりはそういうことだろう。

お前だって「一応」女の子だし。

「!?!? そ、それは違うよ!」

「どう違うんだ」

「私は安全な動物だから! 牙も爪も無くした、穏やかで心優しいアキトの守護獣なの♪」

そんな胡散臭い動物を守護獣にした覚えはないぞ。

大体、牙も爪も無くしてどうやって守るんだ。

「いらねえ。超いらねえ。言葉を話すような動物は無駄に賢い分、知らない知恵ばかりつけるから嫌いだ」

「私は無害だよ。今ならお試し期間として、アナタのお家に出

張サービス!!」

「いや、だからいらんて」

「首輪と鎖が付いてきます!! サブタイトルは『アナタの言いなり』!!」

「事実無根の空想話を大声で語るんじゃねえええ!!!」

今現在、昼休み真っ最中。

冷ややかな視線が集中する。

「首輪と鎖だってよ」 「サイテー」 「真鳥さんに何てことしやがる」 「鬼畜」 「桐山くんって…」 「マジかよ」 「ちょっと羨ましいけど」 「許せねえ」 「ド変態」 「死すべし」

ああ…不穏な呟きが聞こえる。

こ、これはマズイ…!

僕はダッシュでその場から逃げ出すのだった。



いつもの事ながら、放課後ともなると僕はグッタリモードのグロッキー状態。

トイレから教室に戻る途中、声をかけられる。

「桐山くん」

聞き覚えのある声だなあとボンヤリ思っていたら、案の定。昼休みに話しかけてきた女の子だった。

「今度こそ、ちゃんと話を聞いてください」

「うん。昼間はゴメンね」

「いえ…ここじゃアレなので、場所を変えましょうか」

僕は頷いて、中庭にあるベンチへと向かった。

もちろん内心はドキドキだ。

とうとう僕にも、遅延気味の春が！？

冬の夕暮れに目をやりながら、女の子が口を開く。

「えと、私…二年D組の神坂彩音こうさか あやねって言います」

D組と言えば、友絵のクラスか。そう言われてみれば、学園祭で見かけたような気がしないでもない。

「今日は、桐山くんにお話したいことがあって。少しの間、お時間よろしいですか？」

「大丈夫だよ。僕なんぞでよければ」

さてさて：サイコロの目は一体どう出る？

「実は、桐山くんをお願いしたいことがあって」

ん？

お願いしたいこと？

何だかおかしな流れになってきたな。

「ふむふむ。そのお願いって？」

神坂さんは顔を真っ赤にする。

そして絞り出すように言う。

「――えと、相良航平くんって知ってますよね？」

「え、航平？ うん：知ってるけど」

どうして航平の名前が出てくる？

あれ。何故だろう、嫌な予感がするよ？

「お二人は、仲良いですね？」

「ん。まあ、ね」

素直に頷くのは躊躇われるが。

「も、もうすぐバレンタインじゃないですか？　そ、それで…桐山くんにお願ひがありまして…」

あれ。

ちょっと待って。

もしかして――――

「聞いているかな？　神坂さんって、航平のこと…」

神坂さんは、顔を更に赤くすることで僕の質問を肯定した。

マジで？

え、ちょ、マジで？

どうしてこんな可愛い娘が航平なんか惚れるんだ！？

アイツの…つか、え？　は、はあ！？

だんだん混乱してきたぞ。

「アイツなんかのどこが良いの？」

「えっとですね…私、喫茶店でアルバイトしてた頃がありまして。そこで先輩店員だったのが相良くんなんです。優しくて…仕事も丁寧に教えてくれて…でも、相良くんはすぐにバイトを辞めちゃったんです。辞める前に気持ちを伝えようと思ったんですけど―――その頃は自分に自信が持てなくて。それから頑張って自分を磨いて。」

相良くんに対応しい女になろうって決めたんです。それからというもの——」

途中から僕は話を聞くどころではなくなっていた。

何故って。

こんな健気な娘、久しぶりに見たよ！

僕の周りにいるのはアブノーマルな娘ばかりだから（奈月ちゃん除く）。

本当、航平には勿体ないくらい良い娘だ。

言われてみれば、学祭で二年D組を襲撃した際、やたら相良くん相良くん言ってる娘がいたなあ。

「——という訳です。で、桐山くんは是非ともキューピッドになってもらいたく：」

「もちろん！航平はどうなろうと知ったことじゃないけど、僕は神坂さんの健気さに心を打たれた！喜んでキューピッドになろう！具体的にはどうすればいい？」

「え？」

「いや、具体的に僕はどうすれば」

「う…そこまで考えてませんでした」

しまった！的な表情で神坂さん。

いやいやいや、そのぐらい考えておこうよ。

大丈夫なのかこの娘。もしかして、以外とおバカさんなんじゃないかろうか。

「例えば手紙——はマズイな」

「どうしてですか？」

「いやね、航平のヤツ、散々女の子に振られまくってて、それをネタにされてる所もあるからさ。安易に手紙を書くと、悪戯だと思っただけにしない。そして間接的に僕が神坂さんの気持ちを代弁するってのもNG。絶対本気にしない。だから告白は、神坂さんが自分の口から言わなきゃダメ」

「う…：そうなんですか…」

予想外の展開に絶句する神坂さん。

「心配しないで。僕がアイツを連れて行くから。神坂さんはキツチリと想いを伝える。オーケー？」

「は、はい！」

「それじゃバレンタイン当日。時刻は午後5時。場所は————」

そんなこんなで、僕は唐突に恋のキューピッドになってしまった。
よりにもよって航平の。

まあ、神坂さんのためだ。べ、別に航平のためじゃないんだからねっ!!



そしてやってきたバレンタイン当日。

「おはようアキトっ!そしてハッピーバレンタインっ!!」

我が家の玄関で声を張り上げる陽。

そして突き出されるは、色鮮やかにラッピングされた、畳半畳分はあろうかという巨大な包み。

「おう、ありがと。つか、デカすぎじゃね?」

「そんなことないよう。私の愛情の大きさだもん♪」

とろけそうな笑みを浮かべる陽。

デカイだけでなく重いな、コイツの愛情とやらは。

「帰ってきたらじっくり食べてねっ。もちろん手作り!味は保障するからねい」

「そこは分かってるよ」

陽の料理の腕はよく理解してるつもりだ。手作りという所が少し引つかかるが、美味しくいただける事に変わりは無い。

一度家に戻って巨大なチョコを置く。

置いたはいいが、もの凄い威圧感だった。

ま、いいか。

気を取り直して、僕は陽と一緒に学園へ向かった。

学園に到着し、下駄箱を開ける。中にはチラホラと小奇麗な包み。

おお。僕もなかなかやるじゃないか。

「————ちっ」

背後で聞こえる陽の舌打ち。

すると陽は僕を押しわけ、即座にチョコの回収に入る。手にしたビニール袋に次々と消えていくチョコレートたち。

「おい、ヒナ！お前は馬鹿か！！」

「いいもん！馬鹿でいいもん！これは私が回収して、一人ずつ制

裁を下すんだからっ！私のアキトに手え出そうとするクズどもに！
」

鬼のような形相で陽は回収を終えると、僕の制止を振り切って逃亡してしまった。

やれやれ…

「あ、アキト先輩」

消え入りそうな声が聞こえる。

「お、奈月ちゃん。おはよ」

コソコソと、陽の影に怯えるように僕へと近づいてくる。

「おはようございます！あ、あああの、これ、受け取ってくださいっ！！」

そう言って差し出された可愛いピンクの包み。

奈月ちゃんらしい小ぢんまりした造りだ。

「僕に？ありがとね」

優しく微笑んで、奈月ちゃんの頭を撫でてあげる。

「えへへ…あの、手作りなんで味は保障しかねますが…」

人差し指を合わせて、奈月ちゃんは照れる。

ノープロブレム。味なんて二の次だよ。奈月ちゃんの作ったものなら、例え目も当てられないような料理だって皿ごと食い尽くしてあげよう。

「…ふうん：朝から良い雰囲気だね、二人とも」

不意に聞こえる甘い声。

声の主を発見した奈月ちゃんは、「失礼しますっ！」と言い残し、風のように去っていった。

「…逃げちゃった。せっかく可愛がってあげようとしたのに」

「あのな友絵。何度も言っているように、もっと優しく接しろって」

あんなに怯えて、可哀想に。

「…十分優しいよ？私が本気になったら、奈月は登校拒否か自主退学、もしくは自ら命を――」

「はいストップ。そこまで」

危うくとんでもない発言が飛び出しそうになった。

触らぬ友絵に祟りなし、だな。

「…触るってどこを？アキトなら特別に、いくら触っても祟りは無しだよ？」

心を読むな！そして危うい発言もやめろ！！

「…オープニングトークは置いといて…はい、アキト」

友絵の手から渡されたのは、重厚な黒い包み。

「これ、安全なのか？」

「…もちろん。美味しいよ？でも出来れば、私の前で食べて欲しいな。特に夜」

「何を入れた！？なあ、何を入れたんだ！？」

「…疑い深いなあ。だったら、私が毒見をしてあげようか？」

耳元で友絵が囁く。

あの、体を寄せないでいただきたい。アナタ絶対に確信犯でしょ？

「…あ。それとも、食べて欲しいのはアキト自身だったりして」

「何を言って————っ！？」

僕は思わず飛び上がる。

耳に感じた感触は、あまりにリアル。

友絵の艶かしい舌の感触が、まだ耳に残っている。

「…ふふふ…アキトは可愛いなあ♪」

舌を覗かせながら微笑む友絵。

ダメだ。友絵には勝てる気がしない。

「もう降参です…許してください…」

「…そ。じゃ、続きは部室でね」

続きあるの!?

僕は背筋が寒くなっていくのを感じていたのだった。



「アキト、正直に吐けよ? お前、現時点での収穫は何個だ?」

教室に入ってきた僕に、真剣そのものの表情で聞いてくる航平。

「お前には教えねえよ」

「くっ! でも、そうだな…長い目で見れば、普通に考えて三個は確実だな…いいなあ…俺なんて、俺なんて…」

自分で話を振ってきておいて、自分でへこんでいる航平。世話ねえな。

「俺は今年もゼロなのか!? 誰か義理でもいいからプリーズ!」

教室内の視線は冷たい。

まあ、何だ。

放課後までの我慢だぞ、航平。

あんなに可愛い娘がお前に告白する時を待ちわびているんだからな。

時間は矢のように過ぎ去って、あっという間に放課後。

僕は適当な理由をつけて陽を撒き、未練がましく教室に居残っている航平の後頭部に一撃を入れる。

短い悲鳴と共に意識を失う航平。

僕はロープで拘束した航平をズルズルと引きずりながら、神坂さんの待つ講堂の裏へと向かう。

神坂さんは僕の姿を見て安心したものの、航平を見た途端、顔を赤くして押し黙ってしまふ。

「大丈夫？」

「いえ…あまり…」

「念のためにロープで拘束しておいたよ。女の子の言葉が信じられないヤツだから。特に今日は。耐えかねて逃げ出すといけない」

言いながら、僕は柱に航平を括り付ける。

「よし、と。それじゃ、僕はそろそろ」

「ああっ！待ってください！もうちょっとといってください！むしろ告白が終わるまで！！」

目をグルグルと回しながら神坂さんが懇願する。

「じゃあとつとと済ませようか。こういうのは勢いが大事だから。——おい航平、起きろ！」

「え、あ、ちょ……」

戸惑う神坂さん。ガンバ！！

「————ん……？あ？ここ、どこだ？」

寝ぼけたような声の航平。

「ん？アキト？で、この可愛い娘は誰だ？てか、俺は何で縛られてる？」

次々と疑問を口にする航平。でも、今は後回し。

「いいか航平、よく聞けよ。ここにいる神坂さんが、お前に大事

な話があるそうだ。これは、夢でも悪戯でもドッキリでも何でもないぞ。全部本当だ。それを忘れるなよ」

航平はポカンとしている。

無理もないか。いきなり言われたって何のことか分からないだろうし。

「それじゃ、頑張って。神坂さん」

僕は神坂さんの肩を叩き、その場を去る。

「う…は、はい…」

震えながらも、決意のこもった声で神坂さんは頷いた。

僕が講堂を後にして、学園内に戻ろうとした時、どこからともなく馬鹿な男の叫び声が聞こえたような気がした。



その日の夜。

僕は自室で苦いコーヒーを片手に、甘いチョコレートを食べしていた。

陽のチョコは、味だけは素晴らしいのだが、幅も厚みもバケモノのようにあって、ハンマーで砕きつつ食べるしかない。口で直接食べれば、顎と歯が使い物にならなくなるだろう。完食には、確実に

一週間は必要である。

そして奈月ちゃんのチョコ。小さく形作られた球形のチョコに、これまた細かいデコレーション。手間も暇も恐ろしいほどかかっているだろう。言うまでもなく美味である。ありがとう奈月ちゃん。美味しくいただきました。

友絵のチョコは、個包装のチョコ。見た目は美味そうで、口に入りたい衝動に駆られたが、さすがに怖い。未だ味わうには至っていない。

そんな訳で、陽のチョコをボリボリと食べていたら、テーブルの上の携帯が鳴る。

ディスプレイに表示されているのは『相良航平』の文字。

携帯を手に取り、通話ボタンを押そうとして指を止める。

もし、いきなりノロケでしたらどうしよう。僕は絶対キレる自信がある。

数瞬迷ったが、僕は電話に出る。

「おう」

『——アキト……』

完全に予想外のローテンション。何だ？

「何でそんなにテンションが低い。神坂さんはどうした？」

『…ああ…告白されたさ。生まれて始めて、あんな可愛い娘に』

「良かったじゃねえか。で、お前の返答は？」

『一応な、オーケーしたんだよ。そしたらさ、彼女、すげえ喜んで。デートの約束もしたさ。でもさ…』

ブツブツと、まるでお経でも唱えるかのような航平の声。

「でも、何だよ」

『俺、不安なんだよ。自分に自信がねえんだよ。俺なんかで、彼女を幸せにできるのか？こんなダメ男に、彼女と一緒にいる資格はあるのか？俺なんかが、幸せになっていいのかよ？』

電話口で、僕は絶句する。

コイツ…とんだチキン野郎だな。

今まで散々彼女が欲しいと喚いてやがったくせに、いざ彼女が出来た途端にビビるのかよ。本当にどうしようもねえな。

「あのな航平。彼女はな、お前が好きなんだ。他の誰でも無いお前が好きなんだ。お前より格好いいヤツなんて星の数ほどいるぞ？それでも彼女はお前を選んだ。お前が好きだから。そうだろ？恋愛なんて、単純なもんだぜ」

『単純、か…振られたら、どうしような』

「どこの世界に、付き合い始めた途端に終わりを考えるカップルがいる？ 終わりなんて考えるなよ。考えるなら、終わらせない方法を考えろ。彼女を、幸せにする方法だけ考えてろ」

『…アキト…』

「じゃあな、もう切るぞ」

ブツッ。

ツー。ツー。ツー。

やれやれ。どこまでも手間のかかるヤツだ。

そこでふと考える。

何で僕は航平なんかの心配をしてるんだ？

ああ、クソ。無性に腹が立ってきた。

僕はチョコを掴んで口に放り込む。

ボリボリ…ガリ。

————— 硬い。

今年ほとんどサプライズのバレンタインだった。

とにかくにも、ハッピーバレンタイン。

言いたかないけど、おめでとう。お幸せに。

そしてチョコレートに彩られたドラマが終わっていく。

まあ、ドラマなんて大それたものじゃないのも確かだが。

残ったのは甘さと余韻。

僕の場合、硬いチョコと可愛いチョコと危険なチョコだけど。

それもまた、ひとつのドラマなのだった。

赤色ボールペン



僕は教室の窓から、夕暮れ色に染まっていく空を何となく眺めていた。

さすがに三月ともなれば暖かくなるんじゃないかね？と淡い期待を抱いていたが、そんな訳はなかった。確かに昼間は、真冬と比べれば遥かに過ごしやすくなったものの、朝夕はまだまだ寒い。

「うなあ……アキト……頭痛いよお」

机に突っ伏して妙な呻き声を上げる陽。

山のように詰まれた課題の山が痛々しい。

「お前の辞書に計画的という文字は存在しないのか。古いものを消化しなかったら、溜まっていく一方だぞ」

「いやね、ここ最近モチベーションの低下が著しいですよ」

「表現に誤りがあるな。ここ最近じゃなくて、年中だろう」

陽は頬を膨らませて押し黙る。

やる気が出ないのは分かるが、少しでも片付けていかないと結局自分の首を絞めることになるぞ？

学年末テストの結果も散々だった陽。赤点のオンパレードで半狂乱の状態が続いていた。

そして、当然のごとく追試課題のご登場。今は追試に向けての特訓中だ。

進級に繋がる大事な正念場だぞ、ここは。そろそろ真面目になれよ。

「ヒナ。お前さ、やれば出来るのにどうして真剣にやらない？」

真鳥陽は決して勉強が出来ない訳ではない。授業を真面目に聞きさえすれば、テストで高得点を叩き出すことも可能だろう。コイツに足りないものはただひとつ、真剣さだ。

「だるい。メンドい。かったるい。やる気が無いのにやれないよお」

明らかに教育機関をナメているとしか思えない発言。

「つべこべ言わずに頑張れよ。ほら、もうちょいじゃねえか」

陽から正面の席の椅子に座って、僕は手元を覗き込みながら言う。

「うう…あ。そう言えば、アキトは何で手伝ってくれてるの？」

「え」

「いつもなら自業自得だろ、とか言って見捨てるくせに」

「……………」

「やっぱり…私とアキトの間には、切っても切れない信頼関係が築かれつつあるんだね！小指と小指を結んでいた頼りない赤い糸も、今では赤い鋼鉄製のワイヤーに！！」

自分の小指と僕の小指を引き合わせ、恍惚の表情を陽は浮かべる。

僕は冷静に、その架空の糸を赤いボールペンで切り裂く仕草をする。

「はいはい、そういう小芝居はいいから」

「ちえっ。————で。本当の所はどうなの？」

しつこく追及してくる陽。

どう誤魔化したものかね。

まさか『塚田先生にメシを奢ってもらったから手伝う気になったんだよ』なんて本当の事を言う訳にもいくまい。多分、相当ヘコむだろうから。

もしもそうになったら、勉強どころじゃなくなる。

塚田先生にキャッシュバックを求められても困るしなあ。

ええい！今だけは、安っぽいプライドをゴミ箱にポイだ！！

「……ヒナと一緒に卒業したいからに決まってるだろ？ここでダ

づられでもしたら困る。それとも何か、僕は迂闊にお前の心配もできな
いのか？」

ぐああ！！

やべえ、クールで真面目な表情を保つのが辛い！！

気を抜けば、顔面が即座に炎上する！！

必死に平静を装い、陽の反応を窺ってみる。

すると。

言葉を失って、硬直した陽。次第に顔が赤く染まっていき、右の
鼻から赤い液体が一筋流れる。

は、鼻血！？

「ちょ、おいヒナ！血が出てる、鼻から血！！」

僕はハンカチを取り出して、陽に投げつける。

受け取ったハンカチを鼻に当て、それを確認する陽。

「うわ、ホントだ！鼻血ブー！！」

何でこの会話の流れで鼻血を流すんだ、お前は。

僕が呆れながら陽を見ると、何故かハンカチを顔に当てたまま離
さない。

よくよく見ていると、不自然な呼吸動作を繰り返している。

「ヒナ?…ってお前! 僕のハンカチの匂い嗅いでんじゃねえよ!
! 気持ち悪い!!」

「はう…アキトの匂い♪」

「やめい!!」

僕は強引に陽からハンカチを奪い取る。

「大丈夫だって! ちゃんと洗ってから返すから!」

「確実に返す気ないだろお前!」

やれやれだ。無意識の内に溜め息がこぼれる。

陽は先ほどとは別人のように、大人しくペンを動かし始める。

「ふふふ…そっかあ…アキトはそんなに私と一緒に卒業したいのかあ…ふふふ…」

不気味なニヤケ面を貼り付けた陽は非常に怖い。

「私とアキトの関係は、日進月歩で進化していつてるんだねっ!
まさに現在進行! アイエヌジー!!! イエイ!!!」

「黙れ! 口じゃなくて手を動かせ、手を!!」

「らじゃー!!」

テンションが冗談みたいに上昇している陽を見ていると、取り返しのつかない言葉を吐いてしまったような気分になってくる。

とか何とか言っちゃって。

さっきの言葉だって、結構本心から来るものであったことは秘密である。

思わず苦笑してしまう僕なのだった。

遠くから聞こえる吹奏楽のメロディ。

僕らしい教室に響くシャーペンの筆記音。

やがて陽が達成感のある歓声を上げる。

僕はプリントを受け取って、解答片手に赤色のボールペンを握り締める。

スイッチの入った陽による答案には、次々に赤い線の花が咲いていくのであった。

青色バード（前書き）

三月は別れの季節。

そして、終わりと始まりの季節。

青色バード



三月末日。春休みを間近に控えた、ある日の放課後。

僕はとある喫茶店にいた。

市内の大通りを一本抜けたところにある喫茶店「ドロップ」。我が郷土史研究部行きつけの喫茶店である。

テーブルを囲んでいるのは四人。

僕と、陽と、郷土史研究部の先輩二人。

先輩方は今月の始めに、めでたく卒業を迎えた。二人仲良く市内の大学へ行くそうだ。

今日は最後のお別れ会的な集まり。とはいえ郷研としてではなく、僕と陽が二人をお呼びしたのだが。

「卒業おめでとうございます。お二人とも」

とりあえず、形式に囚われたつまらないお言葉を。

「ああ、ありがとうアキト。郷研には顔出せなくて悪かったな。僕らの代は忙しいヤツばかり集まったんだよな」

「いえいえ。僕らも僕らで好き勝手やってましたから」

「そっか。ま、活動目的不明な部活だからなあ。それもしようがない」

「ですね」

そう言って、僕と英輔先輩は笑い合う。

くろもり えいすけ
黒森英輔。

郷土史研究部で知り合った、数少ない僕の尊敬する人。長めの髪と落ち着いた瞳。目立つタイプでは無いけれど、一度目にしたら忘れられない存在感。もう何から何まで僕の理想だ。陽や咲先輩は声を揃えて「二人はそっくりだ」と言う。それは恐縮でもあり、そしてかなり嬉しい。確かに基本的なノリも似ているし、話も合うし、容姿もどことなく似ているような気がする。

英輔先輩は、僕の理想であり、かつ永遠の目標だ。

「それにしてもさ、エースケとアキトは並ぶとホントに兄弟みたいだねえ」

ニヤニヤ笑いと一緒に口を開いたのは、咲先輩。

たちかわ さき
太刀川咲。

同じく郷土史研究部の先輩だ。僕に言わせれば、陽と咲先輩の方が似ていると思うのだが。改めて説明の必要が無いくらいに陽と容姿が酷似している。陽の方も咲先輩に懐きまくっていて、姉妹にしか見えない。

「え。マジっすか咲先輩！それは僕にとって最大級の褒め言葉なんですが」

「それはオーバーな物言いじゃないかアキト？」

英輔先輩は苦笑する。

「いえいえいえ。英輔先輩は僕の理想ですから」

これは大マジである。

「あんまり僕にばかり構うなよ？陽に刺されるのはイヤだからな」

割と真実味の帯びた声色で英輔先輩。

「や、やだなあもう！英輔先輩は何を言ってるんですかあ！？こそそ、そんなこと無いですよお！！」

陽がちよっと焦っているように見えるのは気のせいだろうか。

「ま、そんなことしたら私が陽を刺しちゃうかもね」

ニヤリと咲先輩が笑う。

嫌ですよ、そんなドロドロの連鎖は。

「はう？そ、そんな！咲姉！」

「にしし。冗談、冗談」

ポンポン、と咲先輩は陽の頭を撫でる。

微笑ましい光景だった。そう信じたい。

僕はコーヒーを一口含み、前々から疑問に思っていたことを聞いてみることにした。

「あの。質問なんですけど、郷研って部員は全部で何人いたんですか？全員揃ったこと無かったし」

「後輩組の五人は置いておくとして：要するに、僕らの学年が何人いたかってことだろ？」

「そうです」

さすが英輔先輩。話が早い。

「まず、僕と咲だろ。そして部長にして和哉の兄貴、新藤洋哉。しんどう ひろやそれと有名人の鷹宮遥。たかみや はるか計四人。つまり総勢九人の部活だった訳だな」

僕はしばらく絶句していた。

一度も会話を交わさないまま卒業してしまった人が、部内に二人もいたのか。

つか、和哉に兄弟がいたんだ。そう言えば和哉って、あの経済産業のダークホース、新藤グループの三男坊なんだっけか。

それに鷹宮遥って。学園の有名人じゃないか。鷹宮って超名門だし。あれ？鷹宮？確か友絵の名字って高峰だよな？あそこって鷹宮の分家か何かだったような…

「洋哉は和哉と瓜二つ。まさにコピーしたような見た目と性格だし、遥と友絵は親戚同士。似た者って言うか、繋がり深い人ばかりが集まる場所なのかな、郷研って」

どうやらそのようですね英輔先輩。

でも、ウチの一つ下の代は大変なことになってますよ？代々部長を務めてきた新藤家の人間がいなくなるから自然消滅なんですか？

「少しだけ会ってみたかった気がしますね。あとの祭りですけど」

「まあ…洋哉には会ってもしようがないと思うぞ？和哉に会うよくなもんだから。でも、遥には会っておいても損は無かっただろうな。美人だし、性格もいいし、お近づきになっておいて悪いことは無い。多分アキトだったら可愛がってもらえたんじゃないか？」

「マジっすか？」

くそう。

惜しいことをした。

友絵に紹介してもらおうかな……っ！？

そこでようやく、陽が僕を睨みつけていることに気付く。

ちなみに英輔先輩には咲先輩の視線圧力。

そんな、ちょっとくらい良いじゃないか。僕たちだって男の子だもん。

英輔先輩が、その重みに耐え切れず、話を変える。

「ま、まあ何だ。郷研は個性的な部活なのだよアキトくん」

「そ、そのようですねえ。英輔先輩」

これはちよつと無理があるんじゃないですか英輔先輩!?

でも結果オーライだったようで、陽と咲先輩は大きく舌打ちをした後、元通りになった。

陽は自分のコーヒーを飲み干し、元気よく宣言する。

「よし!それじゃ、次はどこ行きますか?盛大に祝いますよ、お二人の門出を!」

「いいねえ。ではでは、カラオケでも行こっか!」

「大賛成です!!」

それから数分後。

喫茶店を後にした陽と咲先輩は、ノリノリで歩き出した。

僕と英輔先輩は苦笑しながらそれに続く。

大通りに出た辺りで、英輔先輩が僕に問いかける。

「アキト、一つ聞いてもいいか？」

「何ですか」

「…お前は、いつまで自分を騙し続けるつもりなんだ？」

ひどく曖昧な問いかけだったけれど、僕はすぐに質問の意図を理解する。

「どう…なんででしょうね。僕自身、素直になりたいって気持ちはあるんですけど、変なプライドが邪魔ばっかりしてて。あと一步を踏み出せないんですよね」

分かってはいる。

理解もしている。

アイツの気持ちに、答えてやりたいと思う。

なのに。

それなのに。

「こんな自分が、ほんと嫌になりますよ」

吐き出した言葉は、素直な感情。

ありのままの僕だった。

それを聞いていた英輔先輩は、とても落ち着いた口調で切り返す。

「やれやれ。そういう所まで僕と一緒にかよ。わざと似せてるんじゃないかと勘繰りたくなるな。ここまで似てると」

「……はは……光栄っす」

自嘲気味に僕は顔を歪める。

「もう答えは決まってるんだよね？ただ未だに照れとプライドが捨てきれない……か」

「……そうです」

「なら大丈夫だ。青い鳥に気付かないまま走り回る馬鹿野郎じゃないってことだしな。お前ならきつと叶えられる。自分に自信を持って。自分に、正直になれ」

英輔先輩の笑顔。

それは、僕も似ていると称された笑顔。

僕も、こんな魅力的な顔で笑えているのだろうか？

「こら、そこの似た者同士！早く来いっ！！」

楽しげな咲先輩の声。

「分かった分かった。今行くから、大声で騒ぐな」

苦笑した英輔先輩が言う。

「ほら、お姫様たちがご立腹だ。急ごうぜアキト」

「…ですね」

僕と英輔先輩は歩調を速める。

ふわりと、春色の風が吹いたような気がした。



それからカラオケで熱い時間を過ごし（主に女性二名がだが）、時刻は夜の七時を回ったくらい。

「二人とも、今日はありがとな。また次の機会にでも」

「はい。英輔先輩、お元気で」

「おう。アキトもな」

僕らが爽やかに別れの挨拶を済ませている横で、陽が咲先輩に泣き付いていた。

「うう…咲姉…！私のこと忘れないでね…！」

「よしよし。忘れないに決まってるでしょ」

陽をあやししながら、咲先輩は微笑む。

「私がいなくても、しっかりアキトに甘えればいいじゃない」

「うんっ…！」

うわぁ…超笑顔だよ…

「そういう訳だからアキト、陽をよろしくね。泣かせたりしたら承知しないから」

威圧感のある瞳で睨みつけられる。

「わ、わかりました」

恐る恐る僕は頷く。

とてもじゃないが、首を横に振れる雰囲気じゃあない。

「よろしい。それじゃ、元気でね二人とも。後悔だけはしないように」

満足そうな笑顔になる咲先輩。

瞳の端には、意味ありげな色が浮かんでいた。

そのころは？

首を捻る僕に、英輔先輩が近づいてくる。

「————頑張れよ」

「…はい」

英輔先輩は優しげに微笑んで、僕の頭をクシャクシャと撫でる。

心のどこかで、決意が固まったような気がした。

何故だか知らないが、そんな気がした。

まさかとは思うけれどこの二人、打ち合わせでもしてたのか？

「じゃあな。良い報告を期待してる」

「はい！」

遠ざかっていく先輩たち。

その姿はとても幸せそうで。

「ねえアキト、良い報告って何の話？」

「何でもねえよ。流しておきなさい」

「気になるもんっ！！私とアキトの間に隠し事は無しだよ！思ったことも即座に行動に移すことっ！私のように！」

言うが早い、陽は僕に抱きついてくる。

「えへへ…アキトお…咲姉の言った通り、思いっきり甘えるのだあ♪」

連続的に繰り返される頬ずりの感触に、くすぐったさを覚える。

だが問題は全く別のところにあった。

作為的とは思えないタイミング。

あまりにも出来すぎた流れに、僕は焦るしかなかった。

やってくれましたね、先輩方。

心臓は早鐘のごとく。

オーバーヒート気味のオーバービートを刻む。

悪質な循環が体を巡る。

ああ、何で緊張してんだよ僕は！？

陽がいつも僕に言ってるようなことを言うだけなのに！！

「…アキト？」

いつもなら即座に陽を引き離しているところだ。なのに僕はいつまでも動こうとしない。それを不審に思ったであろう陽が訊ねてく

る。

乱れまくった脈をひた隠し、僕は静かに冷静さを取り戻そうと試み、心の中で深呼吸を繰り返す。

「ヒナ」

「んにゃ？」

「…今までゴメンな…お前と出会って、同じ時間を共有して、伝えなきゃいけない大事な言葉が心の中にあっただのに、照れだとかプライドだとか、どうでもいい理由をつけて誤魔化してきた。でも、それも今日で終わりにする」

「…アキ…ト？」

「本当はさ、今更な気持ちはずっと付きまどってたんだよ。今更口に出して言うような事なのか？…って。当たり前すぎて、後回しにしてた」

陽は、何も言わない。

ただ黙って、僕の言葉を待っている。

「何だかんだ文句を言ってたけどさ、僕はヒナと過ごす時間が好きだから。ヒナと一緒にいる時間が、凄く大事で大切に…だから…」

僕は目をつぶる。

そして言えなかった言葉を舌に乗せる。

複雑そうな表情の陽に向かって。

「言うぞ。僕は、ヒナのことが——」

春への兆しと一緒に、染まっていく街。

その片隅で、僕らに訪れたのは遅すぎた春。

気付いていながら、言えなかった想い。

もしくは、近すぎて見えなかった青色の鳥。

いずれにせよ、僕らはようやく本当の自分に出会えた。

ふわりと、また春色の風が吹いたような気がした。

桜色スマイル



四月の始め。春休みが明け、新学期が始まった。僕の高校生活最後の一年間のスタートだ。

不安と期待を抱いていたクラス替えも行われたのだが、幸か不幸か二年の時とさほど変わらない顔ぶれ。強いて挙げるとするならば、友絵が同じクラスになったということくらいか。

三年C組。担任はまたしても塚田先生。これで見事に三年連続の同じアルファベット、そして同じ担任だ。

塚田先生は良い先生なので、別段不満は無いし。

そんな新学期も数日が過ぎ、落ち着きと、いつもの騒がしさが戻ってきた学園内。

廊下をダラダラ歩いて、部室に向かおうとしていた僕は塚田先生に呼び止められる。

「桐山、ちょっといいか」

あれ。

何かやらかしたかな、僕。

少なくとも身に覚えは何一つないのだけれど。

「何ですか？」

塚田先生は僕の目の前に一枚の紙を突き出す。

それは昨日提出した進路希望調査表。

「これが何か？」

「これは真鳥の調査表なんだがな。見てみる、第一希望から第三希望までを」

言われて、僕は目を走らせる。

氏名、真鳥陽。

第一希望、アキトのお嫁さん。

第二希望、アキトのお嫁さん。

第三希望、アキトのお嫁さん。

背筋が色々な意味で寒くなる言葉が羅列していた。

「え…何ですか、この痛々しい将来の展望は」

「微笑ましいと言えばそれまでだが、凄い勇気だとも俺は思う。よく提出に踏み切ったもんだな」

感心した様子で話さないでください！

「前々からそうだったが、最近の真鳥は特に楽しそうだ。まず間違いないお前の影響だろうな。進展でもあったのか？」

そのエロオヤジのような顔はやめていただきたい。

「その辺はプライベートなことなんで」

「否定しないということは、そういうことか。成程」

撃沈。

失敗したなあ、もう。

ちなみに、僕らの関係は何一つ変わっていない。僕が気持ちを打ち明けて、陽はそれからバラ色のテンションになったが、それだけだ。字面だけ見れば「友達」からランクアップはしたものの、今までだって陽は過剰かつ異常なスキンシップをとっていた。あれ以上進展のしようもないだろう。

「良かったじゃないか。真鳥の成績も上がってきてるしな。お前は将来進学だったよな？」

「そのつもりですけど」

できれば、あの先輩方二人と一緒にの大学に。今のままでいけば順調に進学できるだろう。

「そうか。なら真鳥も上手く誘導してやってくれ。お前が行くと言えば、喜んで行くだろう」

お嫁さん問題は完全にスルーですな。

当然だけど。

「でも、いくら上がってきているとはいえ、アイツの学力で大丈夫ですか？」

「ああ、その点は問題ないな。真鳥の場合、このまま無事に卒業できればどうにでもなるだろう」

どうにでもなる？

それってどういうこと？

「入試という関門があるのですが」

「入試？そんなの『真鳥家』のブランドがぶら下がってれば、顔パスで入れるさ。あの家を甘く見ちゃいかんぞ」

知っているような口ぶりで話しますね、塚田先生。

「…そうですか。大人の世界って色々あるんですね」

「うむ。お前は知らなくていいことだ」

含みありげに塚田先生が苦笑する。

「それじゃ、よろしく頼むぞ桐山」

「了解しました」

軽く一礼して、僕はその場を後にした。



部室棟へ向かう通路を歩いていると、鮮やかに咲き誇った桜が目に入った。

誘われるようにして、桜が植えられた一帯へ足を運ぶ。上履きだけれど気にしない。

ポカポカと暖かい春の陽気。満開で微笑む桜は、まさにその人生を謳歌しているのだろう。桜の花だけにね。

視線を奥にスライドさせると、木の下で佇む一人の人影。

「おい、ヒナ」

「あ、アキト!!」

僕の姿を見つけた途端、嬉しそうにはしゃぎだす。尻尾があったら今はフルスイング状態だろう。

見た目は猫っぽいけど、こういう所は犬だな。

「桜はキレイだねえ。まさに日本人の心!! 私、日本人で良かったと思うよ」

「そうだな。外人の方々には、この気持ちは分かるまいよ」

日本人くらいだろうね、ここまで桜に思い入れがあるのは。

僕もしばし見とれていたのだが、先ほどの塚田先生とのやりとりを思い出す。

「なあヒナ。あの進路希望、本気なのか？」

「ふえ？見たのっ！？…まあ別にいいけど…塚っちも、割と軽い所があるからなあ…本気だけど、悪い？」

「悪いも何も、お前は卒業したらすぐ家庭に入るつもりか。そんなに大丈夫かよ」

陽は何故か幸せそうに顔を崩す。

は？

「えへへ…今までのアキトだったら、すぐに否定してる所だよ？
いつお前と結婚するなんて言った！？とか騒いでさ」

うぐ。

「今のは随分とリアルな意見だったねえ♪少なからず私の心配もしてくれてたでしょ？でしょ？」

ニヤケっぱなしの面で擦り寄ってくる陽。

ああ、鬱陶しい。

確かに失言だったな、今の。

「などと冗談は置いといて」

「あれ!？」

「お前さ、進学はしないのか？」

「進学? メンドい」

アッサリと否定。

バッサリと切り捨てた。

「ちなみに僕は進学希望なんだが」

「じゃあ私も進学する!!」

マッハの速度で食いついてきた。

その間は一秒も無かっただろう。

架空の尻尾がユラユラと揺れている。

「お嫁さんはどうなった」

「え、何? アキトはそんなに私をお嫁さんに欲しいの?..て言うか
私が欲しいの!?! やゝん♪」

そんなカオスな発言はしていないぞ。

「違うっつーの。もし進路を変えるなら、ちゃんと塚田先生に言
って訂正しろよ」

「訂正はしないよっ！私は両方選ぶ!!」

欲張るな。そして意地も張るな。

身の破滅を招くぞ。

「学生婚！学生婚!!」

「やかましい!!」

コイツのテンションの源は何なのだろう。

時々羨ましいと思うことがある。嘘だけど。

「じゃあ、お前も進学希望でいいんだな？」

「ちっちっち。『アキトと一緒にの大学』進学希望」

余計な所で細かいな。

「ま。そのためには頑張って卒業しないとな。真面目に授業に取り
組めよ」

少し意地悪な笑みを浮かべてみる。

それに対する陽の反応は、意外なものだった。

「うんっ！ やったろうじゃないの！！」

暖かい陽気が紡ぐ春の一日。

満開に咲き誇る桜。

その下で咲き誇ったのは陽の微笑み。

どびつきり純真で。

とびつきり無垢で。

とびつきり魅力的な、桜色の微笑みだった。

桜色スマイル（後書き）

思い切って二人をくっ付けてみたはいいものの、物語のテンポに支障が出ないか、激しく不安です。

黄金色ウィーク



肌寒かった四月の陽気は見る影も無く消え失せ、照りつける太陽が恨めしいほどの暖かさ。フライングで夏が到来したと言われても信じる自信があるぞ。

今年のゴールデンウィークは五連休。

これだけ休みがあると、せっかく春休みボケから解消された頭が再び墮落していくかもしれない。

休みがあっても、することも無いのが事実。どうしたものかねえ。

五月三日、水曜日。

この日は陽とブラブラして過ごした。

相も変わらず陽はハイテンションだった。

五月四日、木曜日。

陽が親戚の家へ行くとかで、朝早く出かけていった。どうやら泊まりらしい。

無理矢理僕を叩き起こした陽は、しばらく会えないから、などと理由をつけて僕の唇を奪いに來た。もちろん丁重にお断りした。が、あまりにも寂しそうな顔をしやがるので仕方なしに、本当に仕方なしに、陽の頬に軽くキスしてやった。

陽はしばらく茹で蛸のようなカラーに顔を染めながら、耳からは煙を噴出していた。そんな陽を笑顔で見送った後、僕はリビングでもう一眠り。

そして目を覚ました現在時刻は午前十一時。

「久しぶりだな…こんな時間まで寝てたの」

いつもなら八時を回ると、陽が僕の安眠を妨害しに、わざわざ隣の家からやって来ていたのに。

何だろう、この気持ち。味気ないというか、物足りないというか。

陽がいなくて、僕の日常がここまで静寂に満ちたものだと。

ひとつだけ、これだけは言っておきたい。

断じて寂しいわけではない。これは間違いない。

「…どうした、桐山空斗。僕はこんなキャラじゃ無かったはずだぞ」

調子がよろしくない。

名前も何故か漢字表記。

いかん、いかん。

僕は気分転換も兼ねて、普段滅多にしない散歩を試みることにした。

足の向くまま気の向くままに登校ルートを歩き、大通りにあるコンビニに差し掛かったところで、見覚えのある人物がコンビニから出てきた。

「和哉」

「おう、アキトじゃねえか。お前一人か？陽はどうした？」

「親戚の家に出かけた。て言うか、僕と陽をワンセットで考えるのはやめてくれ」

確かに一緒にいる確率は高いけれど。

むしろ常に一緒だけれど。

何だか恥ずかしいじゃないか。

「事実じゃねえか。ところでアキト。お前、今暇か？」

「暇っちゃあ暇だが」

「そりゃあいい。面白い話があるんだが、聞いてみるか？」

和哉はお得意の小ずるい微笑みを浮かべる。

コイツの話なんぞに興味は微塵も無いが、暇つぶし程度にはなるだろう。

「聞くだけ聞こうか」

「うし。じゃあ歩きながらいくか——俺の知り合いがな、ちょっとした店をやってるんだ。そこそこ客も入ってて、それなりに繁盛してた。だが最近、隣に出来た店のせいで儲けは急降下。エライ目に遭ってるそうだ」

話の内容とは反比例の、実に楽しそうな笑みで和哉は話す。

人の不幸で楽しむんじゃない。いや、和哉のことだから話自体本当かどうか怪しいところだ。

ああ、ちなみに今向かってる目的地はその店な、と和哉は付け足す。

「隣に出来た店って。ライバル店か何かか？」

「関係が無いとは言い切れないが、別物と言っても過言ではないな」

「：ちなみに、その知り合いは何屋さんなんだ？」

オチが見えたような気がするのは気のせいだろうか。

しかも果てしなく下らないオチが。

「焼き鳥を売ってる」

はい、お約束。

「どうせ、隣に出来たのはペットショップでした！ってオチだろ」

僕の一言で、和哉は一瞬にして顔を固める。

実につまらなそうな顔に。

「…お前…オチを先取りするなんて、どういう神経してんだ」

「大体読めるだろ。つか、使い古されたネタじゃねえか」

「いや、これはネタじゃなくて。リアルにマジ話だぞ」

真剣な口調の和哉。

嘘くせえ。

「信じられるか」

「じゃあ自分の目で確かめろよ。ほら、そのタバコ屋の隣が焼き鳥屋だ」

和哉の指差す方向には、寂れたタバコ屋。そして「国内産」の看板がやけに痛々しい、焼き鳥屋であろう店舗。

その隣には。

入り口のドア付近に大量の鳥カゴをぶら下げてある奇妙な店。きつとペットシヨップなのだろう。カゴの中では色彩豊かな鳥たちが羽ばたきあって、羽を撒き散らしている。明らかに悪意を感じるぞ、このデイスプレイは。お隣を潰しにかかっているじゃねえか、このペツトシヨップ。

「これは、ちょっとやりすぎじゃないのか。注意した方がいいだろう」

「一応したみたいだけどな。そこら辺は本人たちの問題だ」

あくまでも他人目線の和哉。まあ、そういう所はお前らしいけれど。

僕は鳥カゴに近づき、極彩色のインコを見つめる。目に優しくないなあ、とボンヤリ思う。

「お前、割と動物好きな所があるよな。だから肉もあんまり食わないのか？」

和哉が問いかけてくる。

確かに僕は、あまり肉を食べない。牛も豚も鶏も魚も。

「動物は好きだよ。人間みたいに小賢しくないしな。でも、食うことに関しては別だ。ただ単に味と匂いが好きになれない」

陸の動物は肉の匂いが嫌い。魚の肉は味が嫌い。何かの料理に混じっていれば大丈夫だが、単品では食えない。というよりは、食おうと思わない。

食の面で僕は随分と損をしていると思うけれど、こればかりはしょうがない。

「アキトは変わってるな」

「お前も人のことは言えないと思うぞ」

僕は軽く笑い合う。

それに合わせるように、カゴのインコが盛大に羽ばたいた。

この日は、こんな風に下らないノリで一日が過ぎていった。

五月五日、金曜日。

この日の目覚めも昼近くだった。

否定のしようがないくらい、生活リズムが崩れている。

「……………」

ベッドから起き上がり、テーブルの上の携帯を手取る。そして

意味無くセンター問い合わせ。

さっきから、この繰り返し。

普段は鬱陶しくてしょうがない陽からのメールを、僕は欲していた。

悔しい。何で僕がこんな気持ちにならなきゃいかんだ。

分かっているのにさあ。陽の泊まってる場所が圏外だって。それでもセンター問い合わせを繰り返してしまう自分が情けない。

—————いや、だから全っ然寂しくなんかないって。

むしろ、せいせいする…よ？

うう…

僕は耐え切れず、普段は全くかけない名前を探し出し、発信ボタンを押していた。

「———お。もしもし、航平か？お前、今何してた？…あ…デート…うん…そっか…ラブラブかあ…それは羨ましいなあ、ははは…うん…うん…ああ…じゃあな…」

ブツツ。

ツー。ツー。ツー。

…ヤバイ。今なら普通に泣ける。

何、この孤独感!?

身を切られるような、とは正にこのことだよ!

悲しみ色をした切なさややるせなさが、容赦なく僕の心をボロボロにしていくな。

もう何もする気力が無くて、僕はこの日、部屋から出ることなく一日を終えた。

五月六日、土曜日。

この日僕は、とうとう部屋に閉じこもる行為にも嫌気が差し、外に出てみることにした。

今日も変わらず照りつける日差し。しかし僕の心には厚い雲が垂れ込めているばかりだ。

脳裏にチラつくのは陽の笑顔。

ああ：僕はこんなにも人恋しい性格だっただろうか。

溜め息を吐きながら、彷徨うように昼下がりの街を徘徊する。

「あれ。アキト先輩?」

「…ホントだ」

進行方向から声が聞こえる。

俯いた顔を上げれば、意外と近くに奈月ちゃんと友絵の顔があった。

「…どうしたのアカト。今にも死にそうな顔して。陽もないし」

「ま、まさか、陽先輩に何かあったんですか？」

またもや陽の不在を不審に思われる。

そこまで不自然に映っているのだろうか。

「別に、そういう訳じゃ…陽は親戚の家に行ってるだけだよ」

「…なるほど…それでアカトは寂しくてしょうがないと」

「そんなんじゃないって。お前らこそ、珍しい組み合わせだな」

友絵と奈月ちゃん。あまり見ない光景だ。

「…ま、確かにそうかも…今日は奈月と一緒に、陽からどうやってアカトを奪い返そうか相談してたの」

冗談に聞こえない冗談はやめろ。

顔がマジだぞ、友絵。

「……………」

奈月ちゃんは控えめに笑う。

あれ。

奈月ちゃん？否定しないの？

「…陽もやってくれたよねえ。一人だけ抜け駆けとか、許せない
…て言うか、許したくない」

ブツブツと呟きつつ、友絵は僕に近づいて来た。

その雰囲気には僕は恐怖を覚える。鳥肌が…！

「…奈月」

「は、はい！」

がし。がし。

友絵の掛け声と共に、僕の両腕は拘束される。

「お、おい…」

一気に不安で包まれる僕に、友絵が耳元で優しく囁く。

「…アキト、お茶でもしない？」



友絵と奈月ちゃんに拉致され、連れてこられたのは喫茶店。いつもの喫茶店。

「…アキトってば。そんなに怖い顔しないでよ…別に何も知らないから」

信用できねえ。

仮にも友絵のお言葉だし。

「…ひとつだけ、アキトに言っておきたかったの」

「何をだ」

僕の瞳を、友絵の黒い瞳がじっと覗き込む。

今までに見たことの無い、真剣な友絵。

僕は息を止め、友絵の次の言葉を待った。

「……私は諦めないよ？むしろ、愛人の方が私にお似合いじゃない？」

空気が凍った。

店内の空気が一瞬にして凍りつく。

意味ありげな前置きから、まさかのトンデモ発言。

もうやってられませんかよ。

「何を言い出すんだお前は！」

「…本心だよ。包み隠さず、純度百二十パーセント」

友絵は目を細め、いやらしく笑う。

「馬鹿馬鹿しい。奈月ちゃんからも何か言ってやってよ」

「わ、私も————」

うん？私も？

「私も、諦めませんから！」

…あれえ？

「アキト先輩の一番になれなくても…私は、アキト先輩の傍にいれるだけで…いいんです。だから…今までみたいに、いっぱい可愛がってください！」

ぴりり。

今度は空気にヒビが入ったような気がした。

そして店内にいる人からの視線が痛い。特に男性客。

「あの…ちょっと待った…お前ら…」

必死に落ち着かせようとする僕の努力は水泡に帰し、友絵と奈月ちゃんは、次第にどす黒いオーラを帯びていく。

こ、怖い…！

僕は立ち上がり、半泣き状態で店から逃亡することにした。

「…あ、アキトが逃げた」

「ああっ！アキト先輩！」

聞こえる声も全て無視。

もう散々だ。

陽…

なあ陽…

早く帰ってきてくれ…

五月七日、日曜日。

眠りの中にいる僕を、容赦なく叩き起こす連続インターホン。

眠い…誰だ朝っぱらから。

全力でドアまで叩いてやがる。何なんだ、一体。

ここまで壮大に叩かれると、逆に出たくなる。一種の意地だな。

しばらくすると諦めたのか、インターホンもドアも鳴らなくなつた。

僕が安堵の溜め息を吐き、再び眠りに落ちそうになると、今度は携帯が鳴り響く。

恨みでもあるのか畜生！！

強引に携帯を引っつかみ、開く。ついでにメールも開く。

「…え」

次の瞬間、僕は部屋を飛び出し階段を下りて、玄関のドアを開けるところだった。

鈍い音を奏でて重い扉が開く。

「アキト、ただいま♪」

限りなく茶色に近い長めの地毛。

低くもなく高くもなく、平均的な身長に、細っこい体つき。

そして何よりも、眩しすぎるほど輝く、満開の笑顔。

それらを一瞬にして確認し、僕は衝動的に陽を抱きしめていた。

「あう…？アキトお…どうしたのいきなり？」

「ヒナあ…！うう…おかえり…！」

「アキト…寂しかったの？」

「…：…ああ…寂しかった」

僕はアツサリと認める。

意地を張っていても、しょうがない。

「えへへ…そっかあ♪アキトも、離れて初めて私の大切さに気付いたんだねっ！」

「…：…ああ」

もう何でもいいよ。

こうして、陽と一緒にいければ。

僕も重症なんだなあ、としみじみ思った。

華やかな名前とは正反対の日々を過ごしていた、ゴールデンウィーク。

それでもやっぱり、上手いこと出来ているようで。

終わり良ければ全て良し。

こうして最後の一日だけでも、黄金色に輝いているのであれば。

今日までのトラブルも、散々味わった寂しさも。

全てはこの時の為の前置きだったと考えれば、これ以上ない演出だ。

そう思う。

否、それでいいじゃないか。

だって、僕は今、幸せだから。

群青色レイニーデイ（前書き）

何かもう、グダグダ極まりない話。

ヘボ作者の息切れが聞こえてしまいそうです。

群青色レイニーデイ



今年もまた、梅雨と呼ばれる憂鬱な季節が到来した。

毎日嫌がらせのように降り続く雨と悪質な湿気で、僕の思考回路はことごとく錆び付いてしまっている。天気の間隔予報も、キレイに青系統の傘が並んでいる。目には優しくても精神には全く優しくないのだった。

「止まない雨は無いとは言え、この天候の前じゃあ信憑性も薄れるってもんだろ」

僕は部室の窓から、雨雲が漂う空を見上げ呟く。

今日で五日連続の雨。気分がモヤモヤして一向に優れない。

「…でも、アキトにとっては待ち遠しい季節だったんじゃない？」

背後から、ネズミをいたぶるネコのような友絵の声。

「どういう意味だ」

「…だって…ようやくアキトの大好きな夏服解禁だよ？ 運が良ければ雨でスケスケ——」

「ストップ！ シャラップ！！」

僕は友絵の危険度マックスな発言を遮る。

それは言っではいけないだろう。

「…毎年ケダモノみたいな目で私を見てくるじゃん…心の声も聞こえてくるよ? 『ボタンをもう一個外せ』とか『ネクタイをもっと緩めろ』とか…」

「そこまで欲望全開な心の声は、断じて僕の中には無いぞ!？」

「…本当に？」

友絵の確信的な輝きを帯びた瞳が、容赦なく僕の頼りない鎧を剥いでいく。

「…いや、ちょっとだけ…その、僕だってオトコノコですから…」

瞬間的に僕の負けが決定した。

情けない。でも、友絵にはどう頑張っても勝てないと思う。

「ちよつと友絵! アキトをあんまり虐めないでよっ!」

陽が立ち上がり、僕を庇ってくれる。

ああ、ありがたや。

「…そうやってアキトを庇って、『自分は彼にとって特別な存在

です』アピール？笑えるね。そういうの」

氷のように冷たい友絵の微笑と口調。

案の定、陽は固まって言葉を失ったままだ。

ここ最近の友絵は以前より攻撃的で、陽は甚大な被害を受けている。

「お、おい。ヒナ——」

僕は今にも泣き出しそうな陽を気遣い、言葉をかけようとするのだが。

「…ねえアキト。湿気でジメジメして気持ち悪い……特に胸の谷間が…」

などと言いながら、制服の胸元を大々的に開けた友絵が擦り寄ってくる。

布の間から覗く素肌の色彩と、理性を強制的に戦闘不能へと追いやる感触に、僕は目眩を覚える。

ああ…夏服に乾杯。そして人間の皮膚感覚に完敗。

とか冗談言ってる場合ではない！むしろ冗談じゃねえ！！

「おい友絵！お前いいかげんしろ！」

「…嬉しいくせに」

「違うっつーの!!」

取り乱しながら、やっとのことで僕は友絵から離れることに成功した。

友絵はそんな僕の様子を、楽しげに見ている。

「友絵。お前最近、いやにアクティブだな」

以前とは比べ物にならないくらい。

「…うん。アキトの愛人希望だから」

その言葉で、今までフリーズしていた陽が動き出す。

「あのねえ! アキトはそんな風によそ見なんかしないもん! いつでもどこでも私しか見てないのっ!」

叫びながら友絵に掴みかかりそうになる陽を、僕は後ろから羽交い絞めにする。

落ち着きたまえ、陽。

「ま、そういうことだ友絵」

「…ふうん。アキトも否定しないんだ…お熱いねえ」

溜め息を軽く吐き、友絵は手近な椅子に腰を下ろす。

「…そう言えば陽、最近頑張ってるみたいじゃん」

「え？私？何が？」

いきなり話の流れが変わり、陽は戸惑う。僕も戸惑う。

「…成績、かなり上がってきてるじゃない。以前から陽を知ってる人は驚きだと思うよ」

「えへへ。まあねっ！」

陽は誇らしげに胸を張る。

一方、僕はちょっとテンションダウン。何故なら僕も、その驚いている一人だから。

今学期の始めに進学モードへとチェンジした陽は冗談みたいに成績を上げ、先月に行われた中間テストでは学年十二位。クラス内ではまさかの三位へと躍り出た。

赤点連続で補習常連の陽が…ねえ。言いたかないが、僕は完全に追い抜かれた。悔しいと言うより、陽の潜在能力の高さに舌を巻くばかり。今までどれほど勉強をサボっていたかが分かるな。

「…私もうかうかしてられないかな」

ちなみに友絵は成績優秀。学年トップテンには常に名を連ねている。結構ハイレベルな大学を狙っているそうだ。

ここにはいないが和哉のヤツも頭は良い。友絵ほどではないにせ

よ、僕は入学してからアイツに一度も勝ったことは無い。まあアイツの場合、違う意味での頭の良さなのだけれど。卒業後は：興味ねえや。

そしてこの僕、桐山空斗は。

勉強はそれなりに出来る方だと思うが、陽に追い抜かれたことは軽くショックだった。ちなみに中間は二十二位。陽とちょうど十位の差だ。

え？

航平？

アイツは問題外。陽ほど末期的では無かったが、毎回危険な低空飛行の連続だった。終わり。

「いやあ、こうして見ると郷研って意外と成績優秀なんだねっ！」

それはお前が急成長を遂げたからこそ言えるセリフだな。

「そう言えば、そろそろ僕たちって部活引退なんじゃないのか？」

六月。早い所はもう引退パーティの話し合いで盛り上がっていたが。

「：『郷研に引退は無い！』って部長さんが言ってたよ？」

部活に顔を出さない部長、新藤和哉。それってどうなのよ？幽霊部長ってヤツか？

「そうなのか？」

「…そうなの。それに今私たちが引退すると、奈月が一人ぼっちになるよ？」

「あ」

そうだ。

新入部員確保の事をすっかり忘れていた。

三年を除けば、部員は二年の奈月ちゃんのみ。これは非常事態じゃないのか？

「奈月ちゃんの為に、部員の確保は必須だな」

「うんっ！郷研が無くなっちゃうのも嫌だしねえ」

僕の意見に陽も賛同する。

「卒業するまでに、何とか部員を集めようぜ」

それでも、今すぐに動き出そうとしないのは僕の悪い癖。

「あれえ？今までのノリはどこに？行くなら今でしょ！？」

ベタな感じで陽はずっこける。

「…部員の勧誘は和哉と一緒にしないと」

「そゆこと」

別に勧誘は部長がしなければならない、とかいう決まりは無いのだが。

基本的にこの郷研は、部長である和哉の気に入った人間しか入れない。航平が未だに郷研部員になれないのには、その辺に理由があるのだろう。

部員を選びすぐった所で、何をする訳でもないのにな！

「うう…だって和哉のヤツ、部活に顔出さないじゃん」

そこは陽に同感だ。

部長の出席率が悪いんじゃないやどうしようもないな。今頃、どこでどんなトラブルを起こしているやら。

「…まあ、何とかなるんじゃない？卒業までには」

友絵までもが先延ばしの意見。

ああ、すごい郷研っばい。この投げやり感。

「そ、そうかな…うん…そうだよね！」

仕舞いには、陽までもが感染。恐るべき、郷研ウィルス。

僕は苦笑して、また雨の降りしきる外に目をやる。

梅雨の郷研部室。

ジトジト、ジメジメ。

湿気と脱力感が支配する空間。

僕らは、今日も今日とてグダグダいっぱい。

厄介な問題はとりあえず横に。

今日が楽しければいいじゃないか。

そんな、イマドキ思考。

緩い時間が流れていく、六月の一日。

群青色で染まっていく、六月の一日。

明日こそはスッキリと晴れてほしいと、僕は思った。

白色ミルキーウェイ



七月。

六月が過ぎたとは言え、まだ梅雨は居座るつもりのようで、ジメジメした陽気は健在だ。

しかしながら本日は七月の七日。七夕なのである。

さすがに今日ぐらいは梅雨前線も霽圀気を察したようで、朝から青空の覗く快晴となっていた。その分暑くて困り者ではあるが。

そこまで考えたところで、僕は思考を現在に引き戻す。

騒がしい教室。

今は授業時間なのだが、本日は七夕ということで授業は中断され、皆思い思いに短冊に願いを書き込んでいる。古典や歴史ならまだギリギリで分からなくもないが、全力で数学の時間なんだがな、今は。担当の教師まで楽しそうに願い事を検討している。童心に戻るのもたまにはいいと思うけれど、授業中の教師がそれでいいんですかい。

小学生ぶりだぞ、こんなことするの。

などと心の中で突っ込んでおく。

教卓脇に置かれたほど良いサイズの竹には、早くも願い事が吊り下げられている。誰が準備したかは知らないが、盗品ではないことを祈ろう。

僕は、隣の席で凄まじい音を立ててペンを走らせる陽の短冊を覗き見る。

アキトといつまでも一緒にいれますように。いつまでもアキトが私を愛してくれますように。二人の愛が強固で頑丈で何があっても決して壊れず、誰にも邪魔されず永遠に甘い時と一緒に刻めますように。二人仲良く幸せで笑顔の絶えない家庭が築けますように。そして出来れば――

細長い短冊に、米粒みたいな大きさの文字で、般若心経のように延々と書き連ねている。何か悪いものでも憑いているんじゃないかと疑いたくなるほどに病的な姿だった。

流し読みだったが、僕はふと気にかかる一文を見つける。

「おい、ヒナ」

「うにゃ？何？全身全霊で願い事を書いてる時に」

今まで見たことも無い位に真面目な顔で陽が振り向く。

「その…十七行目くらいの一文なんだが。『アキトが私のカラダ無しには生きていくのが困難になりますように』って、何じやそりゃ」

想像するのも恐ろしいような願い事をするな。

「私の願い事を素直に正直に、そして忠実に書いてるんだけど？」

可愛らしく微笑むんじゃねえよ。腹立たしい。

「そんな鳥肌ものの願い事をするな！」

「むう…そう言うアキトはどうなのさ」

「僕は、その…秘密だ」

僕は自分の短冊を隠すように抱え込む。

「自分ばかりズルイよお！見せなさい！」

陽が叫び声と共に、僕の背中にまとわりついてくる。

「離れろ！」

「見せてくれるまで離れないもんっ！…れろれろ♪」

「うおい！やめろおお！！」

あろうことか陽は、僕の耳の後ろ辺りに舌を這わせやがった。異常な生暖かさが気色悪い。

予想外の攻撃により、僕の短冊は宙を舞う。ヒラヒラと漂った後、ある人物の足元に落ちる。

「お、おい和哉。返せ!!」

僕の短冊を拾い上げ、和哉は目を走らせ、そしてニンマリと笑う。

「ほう、これはこれは。愛されてるな、陽」

僕は強引に陽を振り落とし、乱暴な仕草で和哉から短冊を奪い取る。

「そんなに怖い顔すんなよ。俺のも見るか？ほれ」

別に見たくも何とも無かったが、とりあえず目の前に突き出された短冊を見る。

とりあえず、金で買えないモノ全部欲しい。つーかよこせ。 新
藤和哉

ゆ、夢が無い…!!

こんな汚れきった願い事は永久に叶えられることは無いだろう。

「和哉らしいっちゃ和哉らしいねい」

思わず陽も苦笑している。

僕も似たような苦笑いを浮かべ、自分の――あれ？

「…えつと…『これからずっと――』」

「瞬間的にスリの才能を開花させるな友絵!!」

声で音読を止めさせ、短冊を奪い返す。気付かぬ内に近づいてきていた友絵にビックリ。いつの間に盗った？

「…相変わらずラブラブで羨ましいね」

小馬鹿にしたような表情で友絵が笑う。

「気のせいだ、気のせい。ちょっと怖いような気もするが…友絵のお願いは？」

禁断の扉をノックしてしまったかもしれない。

僕は恐る恐る、友絵の差し出した短冊を見る。

略奪愛成就希望 高峰友絵

いやあああ!!この娘、怖いよ!

その嫌らしい笑みを止めなさい!!

陽：友絵は危険だ。

あれ。陽？

……あ。

僕の視線の先には、またもや所有者の手を離れたマイ・短冊。

そんな僕の短冊を見ながら、照れた笑みを浮かべている陽の姿があった。



それから何のトラブルもなく放課後になり、飾り付けられた竹は中庭に設置された。学校全体での行事だったことに、今更気付いた僕は愕然とした。

更に時間は流れて、今は夜の八時。

僕と陽は中庭にいた。他にも結構な数の生徒がいる。九割強でカップルばかりだが。

中庭に置かれたベンチに腰を下ろして、夜空を見上げてみる。

雲は見当たらず、吸い込まれそうな漆黒の夜空が広がっていて、そこに真っ白な光の帯が散りばめられている。淡く儚く、それでも

しっかりと力強く、光り輝く星たち。

七夕。

織姫と彦星の恋物語。

逢えるのは一年に一度だけ。

悲しい運命だと、思う。

「キレイだねえ：織姫と彦星は逢えたかな？」

「逢えたんじゃないか？これだけ星も祝福してるんだし」

柄にも無く恥ずかしいセリフを吐いてしまう。これが七夕マジックなのだろうか。

それに乗じてイチヤつくカップルたち。何だか場違いの気がする、僕。

キヨロキヨロと落ち着きなく周囲を見渡す。

おや。数メートル先にいるのは航平と神坂さんじゃないか。随分とアツアツの密度で寄り添っている。

何だろう、この気持ち。航平の方に言いようの無い殺意が湧いてきた。

陽も前の二人に気付いたようで、口を開く。

「どうしたのアキト？前の二人が気になってる？」

「まあ、な」

「この前初めて彩音と話したけどさ、良い娘だねえ。航平には勿体ないよ。ホント」

そう言って、しきりに頷く陽。どうやら僕と同じような感情を抱いたようだ。

世の中、分からないことばかりだよな。

僕が視線を夜空に逃がすと、人の気配。

「よお。今日も仲良しさんだな」

気だるげな声が聞こえる。声の主は塚田先生だった。

「む。何さ塚っち。私たちのラブラブタイムを邪魔しようっての？。プンプン！」

塚田先生の登場で、陽は頬を膨らませる。

つか、ラブラブタイムって。そんな赤面ものの呼び名がついてたのか。この時間は。

「そういう訳じゃねえよ。今日は遅い時間まで生徒を残してるからな。見回りだ」

「裏では色々面倒なんですわ。ご苦労様です」

大変だな、教師って。

「塚っちは彼女いないの？」

「彼女かぁ。随分昔にな、いたにはいたぞ。あれは確か：俺が教師になりたての頃だったな」

おお。謎に包まれた塚田先生のプライベートなお話。嫌でも耳が大きくなる。

「――運命ってヤツをな、少しだけ信じてても良い気がしてた。結婚も考えた。でもな：俺の転勤が決まって、引越さなきゃいけなくなったんだ。一緒に行ければ良かったんだが、相手の親御さんが病気でな。地元から離れる訳にはいかなかったらしい。それで、泣く泣くサヨナラだ。当時の俺に、転勤話を蹴れる勇気があればな：。ずっと繋がっていると信じてた手も、未来も、全部置き去りにしちゃった」

自嘲気味の苦笑を浮かべる塚田先生。

「：って。何でこんな話をお前らにしなきゃいけないんだ。せっかくの七夕なのにな」

「その人とは、それっきりなの？やり直そうとは思わないの？」
やや涙ぐんだ顔で陽が聞く。

「そう思った時期もあった。この前な、久しぶりに連絡したんだ

よ。そしたら、別の相手と結婚したそうだと。二人目のガキが生まれるんだと」

「塚田先生……」

「何だ桐山。そんな憐れむような目で見るんじゃないよ。別にもう未練は無いし、後悔もしてない。良かったと思ってる。幸せにしてくれるヤツがいてくれて。俺には、出来なかったことだからな」

塚田先生は僕らに背を向けて、歩き出す。

その背中とは、とてもスッキリとしていた。

「そうそう、真鳥」

足を止め、振り向いた塚田先生が陽に言う。

それは、授業中の塚田先生とは違う、真面目で真剣な声。

「何？」

陽も、その口調に戸惑いながら次の言葉を待つ。

「桐山を、何があっても逃がすなよ。お前を受け止めてくれるのは、世界中探しても桐山だけだ」

「……塚っち……うん！分かった！！」

明るい声で陽が叫ぶ。

「それから桐山」

「はい」

「お前は、何があっても真鳥の手を離すなよ。真鳥に必要なのは他の誰でも無い、お前だ。もちろん、その逆もな」

「…はい。肝に銘じておきます」

自分自身に言い聞かせるように、僕はその言葉を心に刻み込む。

「じゃな、気をつけて帰れよ」

塚田先生は、いつもの口調に戻ってそう言い残し、フラフラと去っていった。

「…アキト」

ベンチの右隣に座る陽が不安そうな声で呟く。

「どうした」

「…私たちは、ずっと一緒だよね？アキトは、どこにも行かないで私の隣にいてくれるよね？」

僕の制服の右袖を掴む、弱々しい力。泣き出しそうな声が、僕を不安にさせる。

そんな声で、そんなこと言うなよ。そんなこと、聞くなよ。

そんな…お前らしくない声で。

一瞬、ほんの一瞬だけ躊躇したが、僕はもう決めたんだ。

自分に正直になるって。

いつもより小さく見える陽を、僕は思い切り抱きしめる。不安を、心配を、全部吹き飛ばすように。

「大丈夫に決まってるだろ。お前の彦星はな、織姫を悲しませるようなことは絶対にしない。約束する」

「……うん…うん…」

ついに陽は僕の腕の中で泣き出してしまった。

うわぁ…これ、周りから見たら結構ヤバめの光景じゃね？

ま、いいか。

七月七日の恋物語。

空に輝くは星たちの声。

どこまでも広がる、真っ白に煌めく天の川。

誰かが誰かの織姫で。

誰かが誰かの彥星で。

大切な人がいるから、頑張れる。必死になれる。

一年に、一度だけだって。

そんな七夕に、あやかってやろうじゃないか。

不意に、夏色へと染まり始めた風が頬を撫でていった。

そして、各々の願い事も揺らしていった。

これからもずっと陽と一緒に、陽の隣で、笑い合っていますように。
桐山空斗

白色ミルキーウェイ（後書き）

そろそろラストスパート。

出来れば今日中にもう一話更新したいです。

水色リバー（前書き）

本日二回目。

水色リバー



八月。

容赦なく照りつける太陽は一向に弱まる気配を見せず、フルドラ
イブで全力回転だ。

そんな夏の洗礼を受けてたまるかと、僕は自室に閉じこもってク
ーラー全開。地球温暖化問題に真っ向から反抗しているダメな子を
演じている。

学生大好き夏休みも、今や終盤。

高校最後の休みなんだから、何か大それた事をやるべきだ！と言
い出した郷研連中の魔の手をかくぐり、今は休息中の桐山空斗で
す。

「はぁ…だるい」

郷研連中による連日のイベント続きで僕の体は疲労困憊。

花火大会や海での一悶着。もう十分すぎるくらいに夏は満喫した
さ。

僕はベッドに寝転んで、眠りの世界へと旅立つ準備はオーケー。

だったのだが、目を閉じた瞬間、テーブルの上に放置した携帯が

けたたましく鳴り響く。

発信者、真鳥陽。

「もしもし。どうした——」

ここ最近、自分でも不思議に思うことがある。

それはズバリ、陽に反抗するという行為が、目に見えて減った自分だ。

以前は過剰なスキンシップに反抗しっぱなしだったのに。

今では、『しょうがねえなあ』の一言で片付けてしまう僕。

得体の知れないモヤモヤも心を包んでいる。

これは良い傾向なのか？悪い傾向なのか？

僕個人の意見としては、陽に影響されて変わった自分を少しばかり恨めしく思う。

でも。

「やっぱり、しょうがねえよなあ」

呟くのは、この言葉。

「どうしたのアキト？」

「最近、自分がどんどん変わってる事に気付いてな」

「そうだねえ。前に比べると、私のこと拒まなくなった」

向かい合っののコーヒータイム。

場所はもちろん、いつもの喫茶店。

陽から電話で呼び出され、メシを食った後ブラブラと街を歩き、
今に至る。

絵に描いたような高校生じゃないか。

「不思議な気分なんだよな。僕は他人に影響されにくい人間だと
今まで信じてきたのに」

「私も驚きだよお。まさかアキトがこんなに変わるなんて」

実に眩しい笑顔を浮かべる陽。

くそう、可愛いじゃねえか。

「そうかい。お前の力は偉大だな」

「ふおふおふお。今頃気付いたのかね」

そう言って、大仰な仕草で架空のヒゲを撫でる陽。

僕はそれを見て軽く嘖き出す。

同じように、陽も笑い出す。

しばらく響いた笑い声の後に、陽が言った。

「ねえアキト」

「何だ？」

「私たちって幸せだね」

「実を言うと、僕も今そう思ってた」

言いつつも、心のどこかでモヤモヤを感じている僕もいた。

暑さのピークを過ぎたとはいえ、昼間はまだ暑い。

喫茶店を後にした僕らは、河川敷に腰を下ろしていた。

これもまた、絵に描いたようなコース設定だな。

ここは陽のお気に入り場所らしい。

目の前を流れる川は、環境汚染が問題視されるこのご時世で、信じられないくらい綺麗な淡い水色をしている。色のカラクリを、以前和哉に聞いたのだが忘れてしまった。プランクトンがどうか、浄水施設がどうか、イオンがどうか、色々と小難しいことを並

べていた気がする。

「夏休みも、もう終わりだねえ。早かったなあ」

「まだ遊び足りないのか？」

「だって高校生活最後の夏休みだよっ!？」

「何でもかんでも『高校生活最後』をつければいいってもんじゃないぞ」

特にお前は、それを多用しすぎだ。

「…高校生活、かあ…」

さっきまでのテンションはどこへやら、しみじみと陽は眩く。

「いきなりどうした」

「いやね、何か感慨深いものがあるじゃん? こうやって、どんな年取ってくのかなあ」

「お前はおばあちゃんか。まだ二十歳にもなってねえのに」

「いいじゃんか別にっ! 私は将来、可愛いおばあちゃんになるもんっ!」

話の趣旨がズレてないか?

しかし、陽の熱弁は止まらない。

「アキトも一緒だよっ？いつまでも仲の良いおじいちゃんとおばあちゃんになるのっ！」

そんなことを言っただけで、陽はおばあちゃんどころか、まだまだガキのようだった。

暑いからやめろと、昔の僕なら言っていただろうか。

でも今の僕は、陽のこんな所も含めて大好きなのだった。

「むう…ある程度抵抗してくれないと、何故かつまんないんだけど…」

理解不能な発言をする陽。

「そうか。それなら喜んで拒否するぞ」

僕は思いつきり爽やかな笑顔で言っただけ。

ああ、何か昔の僕が蘇ってきたぞ？

やっぱり、こっちの方がしっくりくるな。

モヤモヤの正体はこれだったのか？

「ち、違う！そういう意味じゃなくてえええ！ヤダヤダ、一分前のアキトに戻って！イチヤイチャのベッタベタがいいよお！！」

「今までも、そこまで末期的では無かったぞ？」

これは自信を持って言える。

「うう…アキトが虐める…見かけによらず攻撃的だあ……でも、そういうのもアリかも…」

青ざめたり赤くなったり、忙しいヤツだ。まるで信号機だな。

「じゃあ聞くが、お前の理想ってのはどんなだ？」

「ふえ？何でそんなこと聞くの？」

何でって。お前、絶対分かってて聞いてるだろ。

「…お前の理想に近づきたいから」

それを聞いて、陽は顔をニンマリと歪める。

やれやれ。

「私の理想かあ…やっぱり、去年あたりのアキトかな？」

去年の僕と言えば、曖昧な気持ちをいつまでも引きずっていた頃だな。

陽のスキンシップに対して一番難色を示していた頃。

「あの頃が一番しっくりきてたって言うか、一番私たちらしかったって言うか」

確かに、あの頃みたいにバカ騒ぎはしなくなったな。

それが良いことなのか、悪いことなのかは、やっぱり判断できないけれど。

「それには、少し同感かもしれない」

「でしょ？ 実を言うとな私、正体不明のモヤモヤが…」

僕は陽の衝撃発言を聞き逃さなかった。

「お前もか？ 実は僕もここ最近、ずっとモヤモヤしてて」

原因は、どうやらハッキリしたようだ。

「アキトも！？ 症状まで一緒なんて…やっぱり私たちは、結ばれるべくして結ばれた運命の二人！！」

「いやいや。そんな大それたもんじゃないだろ。つか、割とヘヴィな問題じゃないか？ それ」

「お互いがお互いのことを想いすぎて生じる恋愛病の一種なんだよっ！ そうだよ、そうに違いないっ！！」

「病気になるほどお前のことを考えた記憶は皆無だが」

「またまたあ！ ホントのこと言っちゃえよっ！！」

「頼むからその安っぽいキャラクターは止めてくれ」

「ちなみに私は一日中、アキトのことしか考えてません」

「いきなり何をカミングアウトし始める」

「ぶっちゃけ妄想の世界では、三人目のベビィが産まれます」

「そういう痛い妄想は胸の中に仕舞っておこうな」

「更に言っちゃうと、妄想ワールドのアキトは色々と激しいです
♪やん…もう…アキトってばぁ♪」

「なあ、頼むから僕のイメージを崩すような発言は控えてくれ。
っーかやめろ…!」

「アキトは、昼と夜で性格が違う…と。メモメモ…特にベッドの上では――」

「お前の妄想はもはや犯罪だな」

「リアリィ？」

「リアリィ」

「ねえアキト」

「何だ？」

「私たちはやっぱりこれだね」

「実を言うと、僕も今そう思ってた」

様々な角度を試して、選んだ角度はやはりこれ。

行き着いた関係はそのままに、手を繋いだまま悪戯に距離を置いてみる。

近づきすぎた関係は、僕らに不似合いなのかも。反射やワンクッションを利用したり。

周りからどう見えるかではなく、自分たちの認識の問題。

一番居心地の良い角度、距離。

反射の仕方違う顔も見せて。色々な意味でね。

そう。目の前を流れる水色の川もまた、角度と反射の悪戯なのかも。

そんな下らないことを考えていたら、夏がたくさん思い出を乗せて流れて行ったような気がした。

多分、気のせいだ。

水色リバー（後書き）

次回で最終話。

気が向いたら目を通してやってください。

虹色デイズ（前書き）

最終話。

虹色デイズ



夏休み明けの無気力感を背負いながら、僕と陽は今日も今日とて学園へ足を運ぶ。

「もう九月なのに、全然涼しくならないねえ」

残暑の厳しさに文句を吐く陽だが、その顔は爽やかだ。

「全くだ。秋の到来が今から待ち遠しいぞ」

「また学園祭の季節だねっ！」

ああ…そう言えばそうだな。

今年で最後だし、今年こそ静かに学園祭を楽しみたいと思う。

僕が誓いを新たにしていると、背後から自転車のスポーク音。

「いよっす！今日も良い天気で何よりだ。はっはっはっ！」

現れたのは以前にましてハイテンションな航平。もうウザいのなんのって。

「出たよお。幸せムード満点のニワトリが」

「はっはっは。相変わらず陽は辛口だなあ」

その妙に気取った変態口調を止めろ、腹立たしい。

「神坂さんはどうした。一緒じゃないのか？」

「今から迎えに行くんだよ。白馬の王子様的に」

キラリ、と胡散臭くも気色悪い笑顔を浮かべる航平。

寝言を言うのはベッドの中だけにしとけ。馬は馬でも錆び付いた人力の馬じゃねえか。無論、僕らからすれば王子でも何でもない。

「そうかい。じゃあとつとと消えろ」

「アキトの言う通りっ！端的に言えば目障り♪」

僕と陽のダブルパンチで、航平はノックアウト寸前の沈痛な面持ちに変わる。

「お、お前ら…ヒドイよ！うわあああん！！」

泣き叫びながらペダルを踏み込む航平。次第にその姿は小さくなっていく。

「馬鹿だな」

「馬鹿だねえ」

気を取り直して、僕らは歩き出す。

しばらく歩くと住宅街を抜け、大通りに出る。次第に見慣れた制服も増え始める。

「お。前を歩くは後輩ちゃんではないですか」

陽の驚異的な視力が捉えたのは、テクテクと可愛らしく歩を進める奈月ちゃんの姿だった。

十分な距離を見計らって、僕らは声をかける。

「奈月、おはよっ！」

「おはよう、奈月ちゃん」

「あ、お、おはようございます」

いきなりの挨拶にビックリしつつも、奈月ちゃんは挨拶を返してくる。

「お二人は今日も仲が良いですね」

「たりめーよっ！相思相愛とは私たちの為にあると言っても過言ではないっ！」

「それは明らかに過言だな」

陽の暴走にすかさず突っ込み。

これぞ僕らの理想系。

「うう…素直に羨ましいです」

かすかに顔を曇らせる奈月ちゃん。

おやおや。そんな顔は似合わないぞ。

「そんな悲しそうな顔をしない。奈月ちゃんは無邪気に笑ってるのが一番!」

僕はそう言って、少しばかり強引に奈月ちゃんの頭を撫でる。

「…は…はい」

顔を真っ赤に染めて、奈月ちゃんはしきりに頷く。

「ああっ!!今撫でたでしょ!?!奈月の頭を撫でたでしょ!?!」

間髪入れずに陽のブローイングが巻き起こる。

「悪いのかよ。奈月ちゃん的笑顔は、僕の心の清涼剤だ」

「それくらい私だってっ!」

「お前の場合、清涼剤と言うよりタチの悪いドラッグだな」

中毒性がある所とか。

体への悪影響も懸念される。

「上手いこと言うねえ！さすがアキト！……って、それ褒めてないじゃん！！」

ワンテンポ遅れて反応する陽。

「お、お二人とも：まあまあ」

控えめに止めに入る奈月ちゃんは、実に楽しそうだった。

そんな下らない会話とやり取りを継続しつつ、学園に到着。

奈月ちゃんと別れ、僕は教室へと向かう。

教室のドアを開けば、やかましい喧騒が待っていた。

いつものように広がる、日常の匂い。

「お。やっと来たかバカップル」

開口一番、和哉はニヤニヤ笑いだ。

「ヒナはともかく、僕をそっち側に分類するのは勘弁しろ」

「ええ！？そこは私にも救済の手を差し伸べるべきじゃないの！？」

いや、お前は手遅れじゃね？

もちろん口には出さない。

「実は今、今年の学園祭について話し合いをだな…今年は郷研でも企画を立ち上げるぞ」

「僕はパスな」

即座にパス宣言。

学園祭の話は遠慮したい。

つか郷研で。僕らは引退するべきだろう？

「…郷研の出し物を通して、部員を確保しようって企みだよ。和哉はどうせ」

不意に耳元で甘い声が響く。

気配を全く感じさせず、友絵のご登場。

「ああ！そっか…奈月の為に部員確保は絶対条件だね！！」

「…そういうこと。アキトは奈月を見捨てられるのかな？」

うぐ。

汚ねえぞ、お前ら。

奈月ちゃんが関わってきたら、協力せざるを得ないじゃないか！

「アキトには仮装という素晴らしい役割が待ってるからな。今年は何が良い？」

去年のネタをまだ引っ張るつもりか和哉。

「またアキトの仮装が見れるんだあ！やたあ！！」

一人で盛り上がる陽。

待て、待て。

「今年は何が良いかなあ…あ、私と一緒に美女と野獣とかどうよ！？」

「…陽とアキトじゃあ、美女と野獣じゃなくて野女と美獣になりそう」

ボソリ、と友絵が呟く。誰が上手いことを言えと？

「どういう意味だよお！友絵ってばあ！！」

「…そのままの意味」

「うにゃああ！！」

僕は暴れる陽を必死に押さえつける。

友絵は余裕たっぷりに嘲笑を浮かべている。

和哉は我関せずの知らん顔。

これもまた、僕らの日常の一欠片なのだった。

薄くて淡い睡眠が、軽やかなチャイムの音で打ち破られる。

ぼんやりとした瞳で前を見据えれば、ガタイの良い古典教師が教室から立ち去るところだった。

視線を上にとげると、飾り気の無い時計が目に入る。針は本日最後の授業が終了したことを知らせている。教室内には放課後特有の開放感が漂い始めていた。

「いやいや、今日も終わったねー!!」

隣の席で高らかに陽はそう宣言する。

「だな。疲労感がそれを雄弁に物語っている」

立ち上がって背伸びをすると、背骨がバキバキと小気味いい音を鳴らす。

そのまま教室の窓から外に目をやる。

綺麗に染まった夕焼けが眩しい。

さてさて。

授業からも開放されて、後は楽しい放課後が待っている。

ハッキリ言うと、受験生の自覚は全く無い。

それでも良いさ。

「よし。部活行くか」

「いえっさー!!」

元気に叫ぶ陽と一緒に、僕は部室へ向かう。

いつも通り。

いつものように。

過ぎていく時間は限りあるもので、いつか終わりがやって来る。

それでも僕らは今を思い切り楽しみたい。

否。有限だからこそ、思い切り楽しめる。

色々な場面を巡り巡って。

色々な感情をぶつけ合って。

色々な言葉を交し合って。

それはさながら、日常に溢れる様々な色彩のように。

そうやって過ごして来た僕の日常は、きっと永遠に色褪せないだろう。

僕は、そう信じて一瞬一瞬を過ごしていく。

きっと。

ずっと。

もっと。

僕らの過ごす日常が、カラフルに染まっていくことを願って。

虹色デイズ（後書き）

ここまで読んでいただいた方（いるのかどうか分かりませんが）
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7391d/>

カラフルデイズ

2010年10月16日20時35分発行